

NHK

放送開始50周年記念

Wiener Philharmoniker
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
Wiener Philharmoniker

1975

NHK

後援—オーストリア共和国大使館

公演日程

3月16日(日)	東京・NHKホール	午後7時開演
17日(月)	東京・NHKホール	午後7時開演
19日(水)	東京・NHKホール	午後7時開演
20日(木)	東京・NHKホール	午後7時開演
22日(土)	東京・NHKホール	午後7時開演
23日(日)	東京・NHKホール	午後7時開演
25日(火)	東京・NHKホール	午後7時開演
27日(木)	名古屋・名古屋市民会館	午後6時45分開演
28日(金)	大阪・フェスティバルホール	午後7時開演
29日(土)	大阪・フェスティバルホール	午後7時開演
31日(月)	松山・松山市民会館	午後6時30分開演
4月1日(火)	広島・広島郵便貯金会館	午後6時30分開演
2日(水)	福岡・福岡市民会館	午後6時30分開演
3日(木)	東京・NHKホール	午後7時開演
4日(金)	仙台・宮城県民会館	午後6時30分開演
6日(日)	札幌・北海道厚生年金会館	午後6時30分開演



日本放送協会会長
小野吉郎

小野吉郎

NHKでは、放送開始50周年を記念して、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を招へいし、長い伝統の中にきずかれてきた優れた演奏を、全国の皆さまにご紹介することになりました。

このたびの来日が5度目になるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の卓越した演奏につきましては、いまさら多言を要しません。さらに今回は指揮者として、巨匠カール・ベームと世界の楽壇の第一線に活躍するリッカルド・ムーティの両氏を迎えることができました。

流麗なカール・ベームの指揮と躍動するリッカルド・ムーティの指揮、そしてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によるヨーロッパ音楽の神髄は、必ずや全国の音楽愛好家の皆さまのご期待にこたえるものと確信いたします。

最後に、この公演の実現にご尽力いただきました関係各位に深く感謝の意を表します。



駐日オーストリア共和国大使
レギナルド・トーマス

Reginald Thomas

本年、放送開始50周年を迎えた日本放送協会が、記念事業の一つとして、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会を開催されますことは、日本における文化の担い手として意義深いことであります。

オーストリアの音楽とオーストリアの音楽家による演奏は、日本の音楽愛好家の間で特に高く評価されておりますが、西欧古典音楽の普及に力を注いでいる日本放送協会が、このたびの記念行事の一つとして、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を招へいされましたことは、私の喜びとするところであります。

このオーケストラの日本訪問は今回で5回目になりますが、指揮者としては、今世紀において最も偉大な指揮者の一人であるドクター・カール・ベーム、また、楽壇に登場して以来、幾多の著名なオーケストラを指揮し、世界各地の人々からかっさいを博してきたリッカルド・ムーティがおります。

日本の音楽愛好家の皆さまに、このようなすばらしい条件のもとで優れた演奏を鑑賞する機会を与えられましたことは、オーストリアと日本の長年にわたる密接な文化関係を、さらに一段と向上させるものと信じます。

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団——伝統と栄光

——その歴史

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の歴史は、1842年3月28日に始まる。〔※1〕

この日、ウィーン宮廷オペラの楽長であったオットー・ニコライの指揮で、帝国宮廷オペラ付きオーケストラによる第1回の「大演奏会」が開かれた。〔※2〕これはウィーンだけでなくヨーロッパの音楽界にとって画期的な出来事であり、音楽史のうえでも記念すべき日であった。今日でもなお、この日にちなんでウィーン・フィルによる「ニコライ記念コンサート」が開かれている。

1860年には定期演奏会が始められた。その「光輝ある時代」の最初の指揮者は宮廷オペラ劇場に所属し、まだ25才だったオットー・デソフであり、彼は楽員集会での選挙によって選ばれたのである。そして、1870年以来、定期演奏会はウィーン楽友協会会館の「黄金の広間」とよばれる大ホールで開かれるようになった。

ハンス・リヒターが1875年、ウィーン・フィルの指揮者に就任し、途中に中断はあったものの1898年までその職にあり、世を去るまで楽員と固く結ばれて、このオーケストラの一つの「黄金時代」を作った。

そのあとを継いだ“強引な”グスタフ・マーラーは1908年までオペラの総監督をつとめ、1901年まではフィルハーモニーの指揮者を兼ねたが、その後も定期演奏会の指揮台にしばしば登っている。

1903年、フィルハーモニーは常任指揮者制を一時廃止した。その後、当代第一流と目される人たちが客演指揮者として次々に指揮台に立った。この時代の指揮者としては、ヘルメスベルガー、シェーフ、モットル、シャルク、ムック、ニキシュ、それにリヒャルト・シュトラウスなどの名が挙げられる。

1908年、フェリックス・ワインガルトナーが常任指揮者に選ばれ、オペラの総監督の地位を去ったあとなお1927年までフィルハーモニー・コン

サートの指揮者の椅子にとどまった。その間、1917年には土曜日午後、公開総練習が始められ、日曜日午前の公演とならぶ定期公演として定着することになる。

1927年、ウィルヘルム・フルトヴェングラーが首席指揮者に選ばれたが、1930年の夏には、はやくもその任を辞した。しかし、その後も、たびたび指揮者に迎えられた。そして、この偉大な指揮者を記念して、フィルハーモニー・コンサートのシリーズに「フルトヴェングラー記念コンサート」が加えられた。〔※3〕

この時期、フルトヴェングラーとともに活躍した著名な指揮者は“ウィーンの魂”をもったベルリンの音楽家”ブルーノ・ワルター、“イタリアの偉大な独裁者”アルトゥーロ・トスカニニ、“スカラ座のマエストロ”ウィクトル・デ・サバターなどである。

第二次大戦後、ウィーン・フィルは世界の多くの名指揮者と演奏を行っている。クレメンス・クラウス〔※4〕、ヨーゼフ・クリップス、ハンス・クナッパブツァッシュ、カール・ベーム、ヘルベルト・フォン・カラヤン、ディミトリ・ミトロプーロス、ジョージ・セル、オットー・クレンペラー、レナード・バースタインなどである。

1954年以来、ウィーン・フィルは常任を置いていないが、1970年からは、名誉指揮者であり、音楽総監督であるカール・ベームとともに、若い世代のクラウディオ・アバドやリカルド・ムーティがしばしば指揮者として迎えられている。

※1. それ以前にさかのぼる宮廷オペラ劇場付きのオーケストラ。さらに1833年、フランツ・ラハナーによって企画された「芸術家協会」の予約コンサート（定期演奏会）については、今日では一般にフィルハーモニー成立の前史とされる。

※2. 「フィルハーモニー」と銘ついた演奏会が公示されたのは第2回以後で、それは1842年11月22日に得られている。

※3. フルトヴェングラー以後、フィルハーモニー・コンサートでは交響曲の各楽章の間で拍手はされなくなった。——チャイコフスキーの「悲愴」の第3楽章のあとだけは例外として。

※4. クラウスによって創始された「ニュー・イヤー・コンサート」は、いまでもウィーンの名物になっている。また、彼はウィーン攻防戦中、最後の演奏会（1945. 4. 1）と、純粋に最初の演奏会（4. 17）を指揮した。



——その活動

ウィーンにおけるオペラのオーケストラとして、ウィーン・フィルの団員は、オーストリア連邦政府劇場管理局といういかめしい名をもった役所の管轄のもとにある国家公務員であり、ウィーン国立歌劇場への出演が義務づけられている。

そうした“義務”とは別に、ウィーン・フィルハーモニーは独立した一つのコンサート・オーケストラとして、年間10回の定期演奏会のほか、レコードのための録音などの仕事も行っている。

また、そのほかのウィーン・フィルの重要な活動は、毎年夏に開かれるザルツブルク音楽祭への出演、ならびに長期間にわたる演奏旅行が挙げられる。

ウィーン・フィルの最初の演奏旅行は1877年のザルツブルク公演であった。このザルツブルクこそ、のちにウィーン・フィルにとって第二の故郷になった都市である。1920年以來、ウィーン・フィルはザルツブルク音楽祭最大の呼びものとして毎年出演、1925年8月13日、祝祭劇場のこけら落としにワルターの指揮によるバイドン、モーツァルト、ベートーベンを演奏している。

最初の国外旅行は、1900年、パリ万国博に際しての公演で、指揮者はマ

ラーであった。

また、海外旅行は、1922年のワインガルトナーによる南米が最初である。以來、ウィーン・フィルは世界各地へ演奏旅行を行っている。

1923年	南 米	指揮/リヒャルト・シュトラウス
1950年	エジプト	指揮/クレメンス・クラウス
1956年	日 本	指揮/パウル・ヒンデミット
1959年	世界旅行(日本を含む)	指揮/ヘルベルト・フォン・カラヤン
1965年	南 米	指揮/カール・ベーム
1967年	米 国	指揮/カール・ベーム
1969年	日 本	指揮/ゲオルグ・ショルティ
1973年	日本、韓国、中国	指揮/クラウディオ・アバド

ウィーン・フィルのもうひとつの活動として、個々のグループにわかれた室内楽が挙げられる。創立以來、オーケストラのなかにはウィーン・フィルハーモニーの伝統を伝える優れた室内楽団が存在してきた。現在もいくつかの弦楽四重奏団や弦楽や管楽のアンサンブルがあり、いずれも国際的な名声を博していることは言うまでもない。

そのほか、ウィーン・フィルの団員の多くが、ウィーン音楽大学の教授として、後進の育成に力を尽くしている。こうした教師と生徒との間の交

流こそが、優れた才能を持った演奏家とウィーン・フィルの結び付きになっており、共通した芸術的理解やウィーン・フィルの独特な響き(同質性)をもたらしている。

——その組織と構造

コンサート・オーケストラとしてのウィーン・フィルが独立した芸術団体であることはすでに記したとおりである。

このオーケストラの組織は、団員の中から選挙により任命された委員で構成されている理事会が、組織、業務、行政、または管理技術的な仕事を行っている。ウィーン・フィルはコンサート活動のすべてを自分たち自身で自主的に行っているのである。

ウィーン・フィルはその定款に基づき、3年ごとに団員のなかから理事長および理事会委員を選出し、最高機関である総会で多数決により決定を行うのだが、このオーケストラのこうした民主的組織が、オーストリアで民主主義が抑圧されていた時代にも維持されたということは特筆に値する。

理事長と11名の団員からなる委員は、毎週委員会を開き、必要な計画や実施の可能性ならびに動議や提案、例えば演奏曲目や指揮者の選定、新しい団員の採用、そのほか彼らの活動のすべてに関連する問題について協議

している。

理事会委員の個々の機能として……

「理事長」はオーケストラのすべての事務を統率し、「事務局長」はオーケストラの主任秘書である。彼はあらゆる演奏業務の企画や調整、ならびにあらゆる内部的な勤務事項の世話などを行っている。「会計管理」は収入に関するあらゆる決済を担当しなければならない。例えば旅行中の日当、レコード録音による収入、特別演奏会や音楽祭への協力による収入などの精算を行う。「入場券管理係」は定期演奏会のあらゆる入場券業務を行う。「資料係」は、オーケストラの楽譜類の管理をし、すべての演奏会で必要とされる楽譜を用意、とくにパート譜の整備に気を使っている。ウィーン・フィルの楽譜の保有量は膨大なもので、古典派およびロマン派の作品はほとんど集めており、なかには稀少価値のあるもの、例えばリヒャルト・シュトラウスやマーラーのように改訂や注釈を自筆で書き入れたものも少なくない。

そのほか、秩序維持、記録係などの任務がある。

このようにウィーン・フィルが他のオーケストラと異なる点は、その運営が理事会によって決められるのではなく、総会の席上で最終決定が下されることである。

主席奏者



ウィーン・フィルのきわめて民主的な性格は、さらに次の二つの制度からも明らかである。

1. ウィーン・フィルは自分たちの指揮者を自分たちの手で選ぶ。すなわち、理事長は委員会での協議に基づいて提案を行い、オーケストラは投票によって、その可否を決定する。
2. ウィーン・フィルの活動によって得られたすべての収入は、一定のシステムによって全楽団員に配分される。したがって、仕事の多少にかかわらず、ウィーン・フィルに所属するすべての音楽家は、ある程度同じ生活水準が保証される。また、ウィーン・フィルの活動は現在のためだけでなく、将来にも向けられた、いわば社会的な面をもっている。老齢時の収入までが考慮されている。

現在、ウィーン・フィルハーモニーは 140 名の団員によって構成されている。もっともこの数字は年によって多少の増減があり、国立歌劇場管弦楽団のその時々状態によって左右される。ウィーン・フィルの規約によると、このオーケストラの現役の団員は国立歌劇場管弦楽団所属の音楽家に限られ、しかも最少限 3 年以上を終えたものだけに資格が与えられる。それも定年退職者が出るか、何らかの理由で欠員が出ない限り、補充されないのである。

——— いくつかのメッセージ

■ウィルヘルム・フルトヴェングラー

……このオーケストラの各団員は例外なくウィーンの楽派と伝統から生れた人である。

……このような例は全世界に二つとはあるまい。つまり、この地上のいかなる都市でも、音楽がウィーンのように多彩な姿で実を結び、このように音楽を豊かに生み出しているところはないであろう。

■ブルーノ・ワルター

……そこには真の音楽文化が不変の地域的な形態のなかで表現されてい

る。……オーストリアが世界に誇れるもので、この名誉あるオーケストラ以上のものはない。

■アルトゥーロ・トスカニーニ

……あなたがたのあいさつは、われわれがともに働んだ芸術的努力の、多くのすばらしい時間の記憶を思い起こさせる。

■ヘルベルト・フォン・カラヤン

最も傑出した芸術家は、このオーケストラに彼らの個性の極印をくっきりと押すことができる。これによって、このオーケストラは“音楽すること”の精髓そのものとなりえている。

■ジョージ・セル

この比類のない音楽集団の個性である一人二役の役割によって、フィルハーモニーは最も強烈な個人主義と同時に、大きな総体的柔軟性を総合している。

■レナード・バーンスタイン

われわれの目的はまったく共通している。つまり、作曲者の表現しようとするものを、そのとおり忠実に明確に表現することである。

■リヒルト・ワーグナー

親愛なる君たちとともに音楽を奏することは大いに喜ばしい。君たち、ほんとうの芸術家は、正にそれにぴったりの人々だ。

■リヒルト・シュトラウス

フィルハーモニーのかたがたをはめることなど、ウィーンにバイオリンを携えていくようなものだ。〔※〕……私は次のようなことばで私の賛辞を表現したい。「ウィーン・フィルハーモニーを指揮したもののだけが、彼らの何であるかをほんとうに知っている。」

※「アテネにふくろうを連れて行く」という格言をもじったもの。つまり、アテネには、ふくろうが非常にたくさんいるのに、さらに連れ込もうとする無知とひとりよがりを出回ったもの。東洋流にいえば「遺棄(りょうとう)の客(い)のこ」(釈迦(しやか)に説法)といったところであろう。



ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

理事長：ウィルヘルム・ヒューブナー
事務局長：パウル・フルスト

●コンサートマスター

ゲルハルト・ヘッツェル
ライナー・キュッヒル
エーリヒ・ビンダー
ウェルナー・ヒンク

●I. バイオリン

ヴォルフガング・ボドゥシュカ
グスタフ・スウォボダ
アントン・シュトラウカ
エドゥアルト・ワリス
フリッツ・ライター・マイヤー
ハンス・ノヴァク

ゲオルク・ベドリー
フリッツ・ケリー
アルフレート・シュタール
アルフレート・ウェルスト
ヘルベルト・シュミット
ヘルムート・ブッフラー
ヘルベルト・フリュハフ
ペーター・グッツェル
パウル・グッゲンベルガー
ゲルハルト・リベンスキー
ヘルベルト・リンケ
マンフレート・クレン
アルフレート・アルテンブルガー

●II. バイオリン

ウィルヘルム・ヒューブナー
ペーター・ウェヒター
ハンス・ヴォルフガング・ワイス
アルフォンス・エッガー
マリオ・バイヤー

フランツ・フィッシャー
オットー・ネッスチウス
ハンス・クレーシェ
アルフレート・シュビラー
ウルター・シトゥ・ノフスキー
ヨゼフ・コンドル
エルンスト・バルト・ロメイ
ウィルヘルム・マティス
オルト・ウィン・オット・マイヤー
エドウィン・ホフナー
ハインツ・ハンケ
クリスティアン・ツァーローデク

●ビオラ

ブルクハルト・クロイトラー
ヨゼフ・シュタル
ヘルムート・ワイス
ギュンター・ブライテンバッハ
クラウス・バイス・タイナー
ペーター・ペーヒャ
ローベルト・ニッシュ
ゲオルク・バタイ
カール・シュティア・アホフ
パウル・フルスト
ウルター・プロフスキー
クルト・アンデルス
エルハルト・リト・シャウアー
ギュンター・コーカン
ゴットフリート・マルティン

●チェロ

ローベルト・シャイワイン

ヴォルフガング・ヘルツナー
フランツ・バルト・ロメイ
ディーター・ギュルトラー
フリードリヒ・ドレツァル
エーワルト・ウィンクラー
ルードウィヒ・バインル
ウェルナー・レーゼ
ライナート・レップ
アダルベルト・スコッチェ
フランツ・クロイツァー
ラインホルト・ジエグ
ゲルハルト・カウフマン

●コントラバス

ブルクハルト・クロイトラー
ヘルベルト・マンハルト
ホルスト・ミュンスター
マルティン・ウィンガー
フランツ・ホルプ
アルフレート・プラニア・フスキー
フェルディナント・コサーク
ヴォルフガング・ゲルナー
ライナート・デューラー
ゲルハルト・フォルマー・ネク
ミラン・ザガート
ルドルフ・デーゲン

●ハープ

ハラルト・カウツキ

●フルート

ウェルナー・トリップ

ヘルベルト・レズニツェク
ヴォルフガング・シュルツ
ハンス・レズニツェク
ルイス・リヴィエール
マインハルト・ニダーマイヤー
ルドルフ・ネクヴァシ

●オーボエ

カール・マイヤー・ホーファー
ゲルハルト・トッレチュク
ウルター・レー・マイヤー
フェルディナント・ラープ
ギュンター・ロレンツ

●クラリネット

アルフレート・ブリッツ
ペーター・シュミット
ホルスト・ハーイエク
アルフレート・ボス・コフスキー
ウィリー・クラウゼ
クリスティアン・クバシュ
エルンスト・シャイト

●ファゴット

エルンスト・バインベル
ディート・マル・ヴェーマン
カミロ・エールベルガー
オットー・シュダー
フリッツ・ファルトル

●ホルン

ローラント・ベルガー
ヴォルフガング・トンベック

ギュンター・ヘグナー
フォルカー・アルトマン
ハンス・リバルト・ヤーネジチ
ローラント・バール
フランツ・セルナー
ヨゼフ・ヴェレバ
ヨハン・フィッシャー

●トランペット

アドルフ・ホラー
ウルター・シンガー
ヨゼフ・ボンベルガー
ハンス・アルブレヒト
ヘルムート・ウー・ビツシュ
ヨゼフ・ヘル

●トロンボーン

ハンス・バウバー
ルドルフ・ヨーゼル
ヨゼフ・ローム
エルンスト・シャイト

●テューバ

ヨゼフ・ファンメル

●打楽器

グスタフ・シュスター
フランツ・プロシェク
ホルスト・ベルガー
ヴォルフガング・シュスター
クルト・シラン・ホダ
フランツ・ザマーツァル

●Konzertmeister

Gerhart Hetzel
Rainer Küchl
Erich Binder
Werner Hink

●I. Violine

Wolfgang Poduschka
Gustav Swoboda
Anton Straka
Eduard Larysz
Fritz Leitermeyer
Hans Novak
Georg Bedry
Fritz Kerry

●II. Violine

Wilhelm Hübner
Peter Wachter
Hans Wolfgang Weihs
Alfons Egger
Mario Beyer

Franz Fischer
Otto Nessizius
Hans Kusche
Alfred Spilar
Walter Studenovsky
Josef Kondor
Ernst Bartolomey
Wilhelm Matheis
Ortwin Ottmaier
Edwin Werner
Heinz Hanke
Christian Zalodek

●Viola

Rudolf Streng
Josef Staar
Alfred Welt
Herbert Schmid
Helmuth Puffler
Herbert Frühauf
Peter Götzl
Robert Nitsch
Georg Patay
Karl Stierhof
Paul Fürst
Walter Blovsky
Kurt Anders
Erhard Litschauer
Günter Szkakan
Gottfried Martin

●Violoncello

Robert Scheiwein

Wolfgang Herzer
Franz Bartolomey
Dieter Gürtler
Friedrich Dolezal
Ewald Winkler
Ludwig Beil
Werner Resel
Reinhard Repp
Adalbert Skocic
Franz Kreuzer
Reinhold Siegl
Gerhard Kaufmann

●Kontrabass

Burkhard Krätzel
Herbert Manhart
Horst Münster
Martin Unger
Franz Halub
Alfred Planavsky
Ferdinand Kosak
Wolfram Görner
Reinhard Dürer
Gerhard Formanek
Milan Sagat
Rudolf Degen

●Harfe

Harald Kautzky

●Flöte

Werner Tripp

Herbert Reznicek
Wolfgang Schulz
Hans Reznicek
Louis Riviere
Meinhart Niedermayr
Rudolf Nekvasil

●Oboe

Karl Mayrhofer
Gerhard Turetschek
Walter Lehmayr
Ferdinand Raab
Günter Lorenz

●Klarinette

Alfred Prinz
Peter Schmidl
Horst Hajek
Alfred Boskovsky
Willi Krause
Christian Cubasch

●Fagott

Ernst Pamperl
Dietmar Zeman
Camilla Ohlberger
Otto Schieder
Fritz Faltl

●Horn

Roland Berger
Wolfgang Tomböck

Günter Hägner
Volker Altman
Willibald Janeczic
Roland Baar
Franz Söllner
Josef Veleba
Johann Fischer

●Trompete

Adolf Holler
Walter Singer
Josef Pamberger
Hans Albrecht
Helmut Wobisch
Josef Hell

●Posaune

Hans Bauer
Rudolf Josel
Ernst Rohm
Josef Scheit

●Tuba

Josef Hummel

●Schlaginstrumente

Gustav Schuster
Franz Broschek
Horst Berger
Wolfgang Schuster
Kurt Prihoda
Franz Zamazal

●このメンバー表は正メンバーとしてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団から発表されたものである。



提供：Siegfried Lauterwasser

カール・ベーム

渡辺 護

ベームは若いころには、「アイダ」や「カルメン」なども好んで指揮したが、第二次大戦以後はもっぱらドイツ音楽を専門としているようである。しかしこの点から彼をレバートリーの狭い人と見るのは、当てにないと思われる。ドイツ音楽を得意とする他の指揮者は、その中でもいずれかの領域にその最もすぐれた表現が聴かれるというのが普通だが、ベームの場合はハイドンの交響曲から「ヴォツェック」に到るまで、おおかた違いないことがなく、この10年間に、ワーグナーの楽劇、ブルックナーの交響曲などで現代最高の演奏をきかせている。様式の相違を越えて、音楽の根源にまで至り得た、包容力の広い指揮者なのである。

カール・ベームは1894年8月28日オーストリア第2の都市グラーツに生れた。父は弁護士で、グラーツ劇場の法律顧問であり、また大の音楽ファンであった。母はアルザスの生まれで、フランス系の血をうけている。カールは父につれられて、幼少の時から、グラーツ・オペラ劇場に通い、当時まだ初演されて間もないR・シュトラウスの「ばらの騎士」の練習には全部出席して聴いた。父は、音楽家の生活をよく知っているだけに、息子が指揮者になることにあまり賛成せず、カールも父親のあとを継いで法律家となるべく、グラーツの大学で学位までとった。彼のことをドクターと呼ぶのはそのためである。

しかし音楽に対する情熱は押えがたく、グラーツの音楽院に通い、さらに1913年からはウィーンでオイセビウス・マンディチエフスキーに音楽理論を学んだ。この人はブラームスの親友として有名である。

3年間軍務に服してから、1916年グラーツ劇場の練習指揮者となり、1919年にはネスラー作曲の「ゼッキンゲンのトランペット吹き」というオペラを指揮して、この歌劇場にデビューした。この作品はベームのことばによるとまったくひどいオペラなのだそうである。しかしこの指揮ぶりによって第2楽長の地位を得、翌1920年には第1楽長に昇進した。

この劇場で彼が指揮した「ローエングリン」を聴いた当時の大指揮者カール・ムックはベームの才能を認め、ベームをブルーノ・ワルターに推薦し、ワルターは彼をミュンヘン歌劇場の第4指揮者に任じた。ベームはミュンヘンに6年間とどまったが、その間第1楽長にまで栄進した。

1927年から1931年までベームはザルムシュタットのゲネラルムジークディレクター（音楽総監督）となった。この劇場は当時オペラ演出の面に特色があり、大胆に新作を取り上げていた。名演出家カール・エーペル

トをはじめ、後にメトロポリタン歌劇場の指揮者となったマックス・ルードルフ、また同座の総監督をつとめたルドルフ・ビングなどもここで働いていた。

ベームは1931年にはハンブルクの国立歌劇場指揮者に転じ、3年後、ドレスデンの国立歌劇場の指揮者となる。ここに彼は9年間滞在してドレスデンのオペラと管弦楽団をヨーロッパ一流のものに上げた。わが国では、ベームが第二次大戦以後初めて有名になった指揮者であるかのように紹介されているが、すでに1930年代彼は第一流の地位を築き上げていたのである。このころ彼がドレスデンの国立歌劇場を指揮して録音したレコードも少なくない。ハンブルク以来、知遇を得ていたR・シュトラウスから特に高く評価され、ドレスデンではシュトラウスのオペラ「沈黙の女」(1935)や「ダフネ」(1938)の世界初演を行った。後者はベーム自身にささげられたものである。1943年、ベームはウィーン国立歌劇場の指揮者となった。もちろんこれ以前に彼はたびたびこの歌劇場で指揮し、1940年ごろからはウィーン・フィルハーモニーをも定期的に指揮していた。

第二次大戦後の活躍は目覚ましく、1953年にはウィーン国立歌劇場の音楽総監督に任ぜられた。1955年11月5日の再建成ったウィーン国立歌劇場の再開式には彼が「フィデリオ」を指揮し、ウィーン音楽史の榮譽ある一頁にその名を永久にとどめたのである。しかし劇場の音楽総監督と指揮者の任務を兼ねることに無理を感じた彼は、翌年の3月6日音楽総監督の地位を辞した。

自由の身となった彼はアメリカに赴き、シカゴ交響楽団を指揮した。1957年にはメトロポリタン歌劇場で、「ドン・ジョヴァンニ」、「ばらの騎士」を指揮して大きな感銘を与えた。それ以来この歌劇場でもベームは最も人気のある指揮者として、いつも暖かく迎えられている。ザルツブルク音楽祭でも古くから活躍し、1953年には同地でフォン・アイネムの「審判」の世界初演を指揮した。パイロイトに出演したのは比較的遅く、1962年の「トリスタンとイゾルダ」が最初である。

筆者は昨年の夏、ザルツブルクで80才の誕生日を迎える直前のベームの指揮で、シュトラウスの「影のない女」や「コシ・ファン・トゥッテ」を、またハンブルクで「エレクトラ」を聴いたが、老境に入ってもますます若さと情熱を加えていくその指揮振りにはまったく感動させられた。今日、全世界から彼以上に尊敬されている指揮者はいないであろう。

東京大学教授



提供：Herb Schmitz

リッカルド・ムーティ

金沢正剛

リッカルド・ムーティは、1941年7月28日にナポリで生まれた。しかし育ち盛りの少年時代を過ごしたのは、ムーティ家の元来の出身地であったプーリア地方のモルフェッタという、アドリア海に面した海岸のまちであった。彼の家にはもともと音楽好きの伝統があり、医者であった父親自身、テノールの美声の持ち主で、ヴェルディのレクイエムを人前で歌った経験もあるほどであった。そして5人の息子たちも、それぞれ幼いころから音楽教育を受けながら育ったわけであるが、それなにも職業的音楽家に育て上げようというわけではなく、教養として、趣味としての音楽教育であった。

5人兄弟の三男坊であったリッカルドも、こうしてまずバイオリンとピアノを習い始め、25キロほど離れたプーリア地方の中心地であるバリの音楽院に通うようになった。この時、リッカルド少年のなみなならぬ才能を最初に認め、音楽で身を立てるようにと両親を説得したのが、当時バリの音楽院の院長をつとめ、フェデリコ・フェリーニの映画でもおなじみのニーノ・ロータであった。

リッカルド少年が16才となった1957年のこと、ムーティ一家は再びナポリに引越した。やがてリッカルドはナポリ大学に進み、哲学を専攻する一方では、ナポリ音楽院に通って院長ヤコポ・ナポリのもとでピアニストへの道に励んでいた。ところが1960年のある日のこと、先生のナポリが突然予告もなしに、パッハのコンチェルトを指揮してみないかと、彼に指揮棒を渡した。かつて一度も指揮棒を手にしたこともなかった彼は、半信半疑で指揮台に立ったわけであるが、夢中で振っているうちに、これこそ自分にとって一生の道であると確信するに至ったという。

それ以後ムーティが進んだ道は、正にまっしぐらという感がある。1962年のこと、ミラノ音楽院の院長となった恩師ナポリのあとを追って、ムーティもミラノに移り、アントニオ・ヴォットのもとで指揮を学ぶかたわら、音楽院を中心に実際の演奏活動にも活躍するようになった。1965年にミラノのアンジェリクム管弦楽団を指揮したのが公式のデビューとなったが、このほか学生時代には、バイセルロの喜歌劇「マレーキアーロの宿屋」を指揮したこともある。そしてこの時に出演した歌手の1人に、後にムーティ夫人となったクリスティーナ・マッツァヴィッラーニがいたのである。

1967年優秀な成績で音楽院を卒業したばかりのムーティは、見事イタリア人として初めてグイド・カンテルリ国際コンクールで第一等賞を獲得し、またたくまにその名を知られるようになった。指揮者として、カターニャやジェノヴァに招かれたのに次いで、1968年度のフィレンツェ五月祭ではスヴィアトスラフ・リヒテルを独奏者に招いてモーツァルトとブリテンのプログラムを指揮して、大成功をおさめた。翌1969年にはフィレンツェ五月祭管弦楽団の首席指揮者として招かれ、以後5年間のイタリア・ルネッサンスの都を根拠地とすることとなった。

ムーティにとって飛躍の年となったのは、1970～71年度のシーズンである。フィレンツェの管弦楽のシーズンをメンデルスゾーンの「聖パウロ」で開いた彼は、ベルギーの「清教徒」をフィレンツェとミラノのスカラ座で、まったく異なった歌手のメンバーでほとんど同時に上演し、話題を呼んだ。ストラヴィンスキーやヒンデミットなどの珍しい作品のフィレンツェ初演を手がける一方では、チャイコフスキーの第5交響曲で聴衆絶立ちの名演を行い、5月のシーズンをマイヤベーアの「アフリカの女」で開き、マラーの交響曲「大地の歌」で閉じ、曲目の幅の広さを示した。1971年夏「ドン・パスカール」でザルツブルク音楽祭にデビューし大成功を収め、以後プラハ、モントゥール、エジンバラ等、ヨーロッパ各地の音楽祭に出演するようになった。また同じころフィラデルフィア管弦楽団を指揮して、アメリカにデビューして以来、より国際的に活躍するようになり、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ボストン交響楽団など、数多くの世界一流のオーケストラを指揮している。歌劇のレパートリーも広く、なかでも「群盗」や「アッティラ」などのヴェルディの初期の作品を好演して話題となったが、それ以上に評判となったのは「ウィリアム・テル」の完全な形による上演と、スポンティニの「アグネス・ワゴン・ホーフエンシュタウフェン」の復活上演であろう。

1973年秋に巨匠クレメンラーの後任としてロンドンのニュー・フィルハーモニア管弦楽団の首席指揮者に迎えられたムーティは、さっそく同楽団を引き連れて故郷イタリアに演奏旅行を行い、大成功を取めた。1974年秋からは、フィレンツェ五月祭からも手をひいて、ニュー・フィルハーモニアを中心に本格的な活動を開始している。今後の活躍が大いに期待される。

国際キリスト教大学講師・音楽学

PROGRAM

3月 16 日 日 20 日 木

Mar.16<Sun>・20<Thurs>

東京

交響曲 第4番 変ロ長調 作品60 ベートーベン

- I. アダージョ——アレグロ・ヴィヴァーチェ
- II. アダージョ
- III. アレグロ・ヴィヴァーチェ
- IV. アレグロ・マ・ノン・トロppo

交響曲 第7番 イ長調 作品92 ベートーベン

- I. ボーコ・ソステヌート——ヴィヴァーチェ
- II. アレグレット
- III. プレスト
- IV. アレグロ・コン・ブリオ

Symphony No. 4 B-flat major op. 60 Beethoven

- I. Adagio——Allegro vivace
- II. Adagio
- III. Allegro vivace
- IV. Allegro ma non troppo

Symphony No. 7 A major op. 92 Beethoven

- I. Poco sostenuto——Vivace
- II. Allegretto
- III. Presto
- IV. Allegro con brio

PROGRAM

3月 17 日 月 22 日 土

Mar.17<Mon>・22<Sat>

東京

序曲「レオノーレ」第3番 作品72a ベートーベン

舞踊組曲「火の鳥」(1919年版) ストラヴィンスキー

1. 序奏
2. 火の鳥とその踊り
3. 王女たちの踊り (ホロヴォート舞曲)
4. カッチェイ王の魔の踊り
5. こもり歌
6. 終曲

交響曲 第1番 ハ短調 作品68 ブラームス

- I. ウン・ボーコ・ソステヌート——アレグロ
- II. アンダンテ・ソステヌート
- III. ウン・ボーコ・アレグレット・エ・グラチオーソ
- IV. アダージョ——ピウ・アンダンテ——アレグロ・ノン・トロppo、マ・コン・ブリオ

Leonore, overture No.3 op. 72a Beethoven

Suite from, "L'oiseau de feu" (Reorchestrated by the Composer, 1919) Stravinsky

1. Introduction
2. L'oiseau de feu et sa danse
3. Ronde des princesses (khorovode)
4. Danse infernale du roi Kastcheï
5. Berceuse
6. Final

Symphony No.1 c minor op. 68 Brahms

- I. Un poco sostenuto——Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Un poco Allegretto e grazioso
- IV. Adagio——Più Andante——Allegro non troppo, ma con brio

PROGRAM

3月 19日(木) 23日(日)

Mar. 19 <Wed> • 23 <Sun>

東京

交響曲 第8番 ロ短調 D.759 「未完成」……………シューベルト

- I. アレグロ・モデラート
- II. アンダンテ・コン・モート

交響曲 第7番 ハ長調 D.944……………シューベルト

- I. アンダンテ——アレグロ・マ・ノン・トロツボ
- II. アンダンテ・コン・モート
- III. スケルツォ
アレグロ・ヴィヴァーチェ
- IV. 終曲
アレグロ・ヴィヴァーチェ

Symphony No. 8 b minor D.759 "Unfinished"……………Schubert

- I. Allegro moderato
- II. Andante con moto

Symphony No. 7 C major D.944……………Schubert

- I. Andante——Allegro ma non troppo
- II. Andante con moto
- III. Scherzo
Allegro vivace
- IV. Finale
Allegro vivace

PROGRAM

3月 25日(火)

Mar. 25 <Tues>

東京

交響曲 第41番 ハ長調 K.551 「ジュピター」……………モーツァルト

- I. アレグロ・ヴィヴァーチェ
- II. アンダンテ・カンタービレ
- III. メヌエット
アレグレット
- IV. 終曲
アレグロ・モルト

円舞曲「南国のぼら」作品388……………ヨハン・シュトラウス

アンネン・ポルカ 作品117……………ヨハン・シュトラウス

皇帝円舞曲 作品437……………ヨハン・シュトラウス

常動曲 作品257……………ヨハン・シュトラウス

ピチカート・ポルカ……………ヨハンおよびヨゼフ・シュトラウス

喜歌劇「こうもり」序曲……………ヨハン・シュトラウス

Symphony No. 41 C major K. 551 "Jupiter"……………Mozart

- I. Allegro vivace
- II. Andante cantabile
- III. Menuetto
Allegretto
- IV. Finale
Allegro molto

Rosen aus dem Süden, waltz op. 388……………Johann Strauss

Annen Polka op. 117……………Johann Strauss

Kaiser Walzer op. 437……………Johann Strauss

Perpetuum mobile op. 257……………Johann Strauss

Pizzicato polka……………Johann & Josef Strauss

Die Fledermaus, overture……………Johann Strauss

PROGRAM

3月27日(木)

Mar. 27<Thurs>

名古屋

4月1日(火)

Apr. 1<Tues>

広島

4月4日(金)

Apr. 4<Fri>

仙台

歌劇「セミラーミデ」序曲 ロッシーニ

交響曲 第5番 変ロ長調 D.485 シューベルト

- I. アレグロ
- II. アンダンテ・コン・モート
- III. メヌエット
アレグロ・モルト
- IV. アレグロ・ヴィヴァーチェ

交響曲 第9番 水短調 作品95「新世界から」 ドボルザーク

- I. アダージョ——アレグロ・モルト
- II. ラルゴ
- III. スケルツォ
モルト・ヴィヴァーチェ
- IV. アレグロ・コン・フォーコ

Semiramide, overture Rossini

Symphony No. 5 B-flat major D.485 Schubert

- I. Allegro
- II. Andante con moto
- III. Menuetto
Allegro molto
- IV. Allegro vivace

Symphony No. 9 e minor op. 95 "From the new world" Dvořák

- I. Adagio——Allegro molto
- II. Largo
- III. Scherzo
Molto vivace
- IV. Allegro con fuoco

PROGRAM

3月28日(金)

Mar. 28<Fri>

大阪

聖ロレンツォの日のための協奏曲 ハ長調 F. XII no. 14 ヴィヴァルディ

- I. ラルゴ——アレグロ・モルト
- II. ラルゴ・エ・カンタービレ
- III. アレグロ
バイオリン：ゲルハルト・ヘッツェル、ウィルヘルム・ヒューブナー
チェロ：ヴォルフガング・ヘルツァー
チェンバロ：パウエル・フュルスト

交響曲 第25番 ト短調 K.183 モーツァルト

- I. アレグロ・コン・ブリオ
- II. アンダンテ
- III. メヌエット
- IV. アレグロ

交響曲 第4番 水短調 作品98 ブラームス

- I. アレグロ・ノン・トロッポ
- II. アンダンテ・モデラート
- III. アレグロ・ジョコソ——ポコ・メーノ・プレスト
- IV. アレグロ・エネルジコ・エ・パッショナート——ピウ・アレグロ

Concerto C major "Per la solennità di S. Lorenzo," F. XII no. 14 Vivaldi

- I. Largo——Allegro molto
- II. Largo e cantabile
- III. Allegro
Violin : Gerhart Hetzel, Wilhelm Hübner
Cello : Wolfgang Herzer
Cembalo : Paul Fürst

Symphony No. 25 9 minor K. 183 Mozart

- I. Allegro con brio
- II. Andante
- III. Menuetto
- IV. Allegro

Symphony No. 4 e minor op. 98 Brahms

- I. Allegro non troppo
- II. Andante moderato
- III. Allegro giocoso——Poco meno presto
- IV. Allegro energico e passionato——Più Allegro

PROGRAM

3月29日(土)

Mar. 29 <Sat>

大阪

4月3日(木)

Apr. 3 <Thurs>

東京

- 「プロメテウスの創造物」序曲 作品43..... ベートーベン
- バイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102..... ブラームス
- I. アレグロ
- II. アンダンテ
- III. ヴィヴァーチェ・ノン・トロッポ
- バイオリン: ライナー・キュッヒル
- チェロ: ローベルト・シャイワイン
- 交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界から」..... ドボルザーク
- I. アダージョ——アレグロ・モルト
- II. ラルゴ
- III. スケルツォ
- モルト・ヴィヴァーチェ
- IV. アレグロ・コン・フォーコ

- Die Geschöpfe des Prometheus, overture op. 43..... Beethoven
- Concerto for Violin & 'cello, a minor op. 102..... Brahms
- I. Allegro
- II. Andante
- III. Vivace non troppo
- Violin : Rainer Küchl
- 'cello : Robert Scheiwein
- Symphony No. 9 e minor op. 95 "From the new world"..... Dvořák
- I. Adagio——Allegro molto
- II. Largo
- III. Scherzo
- Molto Vivace
- IV. Allegro con fuoco

PROGRAM

3月31日(月)

Mar. 31 <Mon>

松山

4月2日(火)

Apr. 2 <Wed>

福岡

4月6日(日)

Apr. 6 <Sun>

札幌

- 歌劇「セミラミデ」序曲..... ロッシーニ
- 交響曲 第5番 変ロ長調 D. 485..... シューベルト
- I. アレグロ
- II. アンダンテ・コン・モート
- III. メヌエット
- アレグロ・モルト
- IV. アレグロ・ヴィヴァーチェ
- 交響曲 第4番 ホ短調 作品98..... ブラームス
- I. アレグロ・ノン・トロッポ
- II. アンダンテ・モデラート
- III. アレグロ・ジョコソ——ポーコ・メーノ・プレスト
- IV. アレグロ・エネルジコ・エ・パッショナート——ピウ・アレグロ

- Semiramide, overture..... Rossini
- Symphony No. 5 B-flat major D. 485..... Schubert
- I. Allegro
- II. Andante con moto
- III. Menuetto
- Allegro molto
- IV. Allegro vivace
- Symphony No. 4 e minor op. 98..... Brahms
- I. Allegro non troppo
- II. Andante moderato
- III. Allegro giocoso——Poco meno presto
- IV. Allegro energico e passionato——Più Allegro

曲目解説

大 正 興

■聖ロレンツォの日のための協奏曲 ハ長調 F. XII no. 14.....ヴィヴァルディ

18世紀前半、ベネチアはすでに衰退期にあったにもかかわらず、なお歓楽の都であり、芸術の都でもありました。この都市に当時は四つの慈善院があり、果てしなく生れてくる不幸な子供たちのうち、女子だけを収容して国の費用で教育していました。教育ではこのほか音楽に重点がおかれ、彼女たちの演奏はベネチア市民を喜ばせたばかりでなく、外国からの旅行者にとってもお目当てのものであったようです。

ヴィヴァルディはその慈善院の一つピエタと称する施設に関係し、25才の年から死の前年、62才で故郷を離れるまでそこで音楽を指導しました。ピエタ慈善院は14世紀半ばに創立され、19世紀末まで存続しましたが、この時期にベネチアの他の慈善院の音楽水準を抜き、ヨーロッパの音楽名所にさえたったのでした。ヴィヴァルディの膨大な量の作品の大部分はこのピエタ慈善院の少女たちの演奏に供されたもので、この協奏曲もおそらくその一つです。というのは現在残っているこの曲の写本の一つに1727年の日付が見られるからです。

■交響曲 第25番 ト短調 K.183.....モーツァルト

モーツァルトの青年時代の交響曲のうち、今でもよく演奏会に持ち出される作品の一つです。自筆の楽譜に1773年10月5日の日付が記入されており、これがはたして完成の日を正確に示すものかどうかはわかりませんが、とにかくモーツァルト17才の年の秋に、短いウィーン旅行から故郷のザルツブルクに帰って作曲されたものであることはまちがいありません。

このウィーン旅行は宮廷音楽家の地位が目的でしたが、それは得られませんでした。そのかわり音楽的収穫はきわめて大きく、優れたものに会ったときに、それを決して見逃すことのないモーツァルトの慧眼は、特にハイドンの交響曲における充実した仕事に注がれ、早速このト短調の曲をはじめとする新しいスタイルの一群の交響曲が生み出されることになりま

曲題にみえるロレンツォ（ラテン名ラウレンティウス）はキリスト殉教者で、ローマ皇帝の迫害のもとで虐げられていた貧しい教徒たちに、修道院の宝物・財産を分け与えて258年に火あぶりにされたという伝説があります。その祝日は8月10日で、曲はその日の演奏を目標にしたものと思われませんが、「四季」などとは違って描写や叙述とは無関係の作品です。アントニオ・ファンナの種類では、さまざまな楽器のために書かれた協奏曲集F.XIIの第14番にあたりますが、それぞれ2本づつのフルート、オーボエ、クラリネット、それに1本のファゴットという木管楽器が加えられることによって音色は豊饒なものとなり、さらに弦楽器群から浮かび出る二つの独奏バイオリン（コンチェルト）の存在によって、総奏と独奏群との交代と対照は、いっそう鮮かなものになっています。ヴィヴァルディ得意の三楽章の協奏曲ですが、第1楽章にゆったりした序奏があり、全体としてみると緩急緩急という四つの部分からなるいわゆる教会コンチェルトの形になっているのは、曲題とかかわり合いがあるところかもしれません。

した。

当時はまだ交響曲という曲種はオペラの序曲、あるいは演奏会の初めから終わりに演奏されるわくづけの曲というのが一般の通念で、そのため交響曲はそれ自体じゅうぶんな重みを持つものではなくてオペラや演奏会を成立させるための装飾的、形式的機能を果たすものとして書かれていました。そういう事情のなかで書かれたものとしてはこのト短調の交響曲は、その作品自体が作曲家自身を語る堂々たる内容感と形を持っている点で、正に画期的な作品です。14年後に書かれた同じト短調の除つた交響曲(K.550)の前駆的作品といわれるように、ここにはモーツァルトの心のいちばん奥底から吹き流れてくるような暗いものがありますが、それが今日のわ

れわれには後世の作曲家たちのような絶叫的な表現でないだけに、いっそ

うせつせつと迫るものに感じられるわけです。

■交響曲 第41番 ハ長調 K.551 「ジュピター」.....モーツァルト

35才の生涯のなかの24年間にわたるモーツァルトの交響曲制作の終着点であることは申すまでもないことでしょう。モーツァルトの自作品目録の1788年のところに8月10日の日付でこの交響曲が記載されています。32才の年の盛夏です。この夏、2年半ほど中断されていた交響曲作曲が突如再開されて、彼の最後の3曲の交響曲が1か半月ほどの間に立て続けに生れ出たことは、彼の連筆を語るときに必ず触れられる有名な事実ですが、その日覚ましい創作力の噴出が、いったい何を目標に起ったのかは明らかではありません。それをだれもが詮索したくなるのは、モーツァルトはほとんどいつも何かの日当てを持って期限いっぱい仕事をしているからで、この場合も交響曲という大作ですからなおのこと当然目の前に演奏会が予定されていたと考えたいところですが、演奏された形跡はまったく見当たらないのです。

■交響曲 第4番 変ロ長調 作品60.....ベートーベン

作曲家自筆の楽譜の最初のページに1806年と記されているのが、この曲のただ一つの出生記録で、ほかに作曲の道筋を物語るスケッチなどの資料は何もありません。このベートーベン35才の年の春は、歌劇「フィデリオ」の改訂、再演、それに付随したいざこざなど、骨の折れること、やっかいなことに追われましたが、その時期を過ぎると新しい創作力の爆発が起り小旅行を間にはさみながら、大作の数々が生み出されました。3曲のラズモフスキー四重奏曲、第4ピアノ協奏曲、バイオリン協奏曲などがそれぞれこの質量両面の充実は驚異といえるばかりありません。この曲もそれらのすばらしい姉妹たちの中に位置するものです。

この年の夏、シュレジエンのある貴族の別荘に滞在中のベートーベンが出版屋に書いた手紙のなかに「新しい交響曲」とあるのがどうやらこの交響曲らしく、前述のようにスケッチなど何もないところから、あふれこぼ

■交響曲 第7番 イ長調 作品92.....ベートーベン

この交響曲の完成は1812年5月13日、前曲からおよそ6年後のことです。

れる楽想をペンを託して、この夏の日々に作曲が快調に進んだものと思われま

す。初演は翌年の3月でした。この交響曲は第3番「英雄」と第5番（第4番より先に着手し、のちに完成）の間で、その二つの作品とは対照的な、陰のない明朗さを著しい特色としています。骨組みもしっかりしているし、内部にはすばらしい躍動感がありますが、力をふりしぼって戦い勝つというものではありません。前世紀的な誇大なベートーベンの英雄像からみるとその点で第3、第5の間の谷に潜んでしまう作品となり、事実そうという作品としての待遇を受けてきたくらいがありますが、むしろベートーベンの本心の底にはいつもこの曲が示す閑達な明るさが潜んでいて、それが彼の生涯を支える大きな力であったのではないかと考えれば、この曲は非常に大事なものを語った貴重な作品といえることができます。

作曲はその前の年から始まり、多くのスケッチがなされていますが、第2

楽章の主題は第4交響曲の時期に着想されたものが、もういちどこの交響曲の第1楽章を練っている間に取り上げられて陽の目を見ることになったようです。初演は作曲完成の翌年の暮れ、ナポレオン支配を脱したお祭り騒ぎの気分なかで行われて大かっさいを受け、再演に続く再演という珍しい事態が起りました。これらの演奏会には俗称「戦争交響曲」という時勢ものの作品がついてまわって、それがあおりあげたふんい気が第7交響曲をも併呑してしまったかもしれませんが、この交響曲そのもののなかにも聞き手を激しい興奮に走らせるものがあることも事実です。

それは古くからリストやワーグナーにも指摘されたようにリズム交響曲として首尾一貫、たいへん強い緊張の持続があるからですが、さてこの作

■序曲「レオノーレ」第3番 作品72a

ベートーベンの時代には歌劇で成功することが作曲家の評価を高めるための、ほとんど絶対の条件でした。りっぱな歌劇をもたない作曲家は、ほかにどんなよい仕事をしていても一流とはみなされにくかったのです。ベートーベンが歌劇「フィデリオ」(作者は初めから「レオノーレ」という題名にしたかった)の作曲に非常な努力を払ったばかりでなく、再演の機会をつかまえては台本から検討しなおして大幅改訂を行ったのも、またその時間間の人たちがあだだとうだと騒いでも、みな歌劇上演がいへんな重大事であったからです。

最終稿の現「フィデリオ」序曲の前に書かれ、結局振り落とされてしまった序曲は3曲です。決定版ができるまでに台本も音楽も変ってきていま

■「プロメテウスの創造物」序曲 作品43

ナポリ生れの舞臺家ヴィーガーの依頼で、1800年からその翌年の初め(作者30才)に作られたバレエの序曲です。ヴィーガーは当時ヨーロッパ中に名のきこえた大物でしたから、彼の台本でバレエを書き、劇場に進出できるとなれば、これはベートーベンにとって大変よい仕事だったことはいうまでもありません。

■歌劇「セミラーミデ」序曲

「セミラーミデ」は1823年に書かれ、同年ベネチアで初演された歌劇で、

品の表明するものがはたして初演当時のお祭り騒ぎ的な浮ついた気分とほんとうに合致するものなのかどうか、それは作品によく耳を傾けてみればすこぶる怪しいものといわねばなりません。なるほどこの交響曲はリズム中心で躍動的であり、そのため外見は豪壮にみえますが、音楽の語るところにはかなり淡く気むずかしいものがあるように思われます。決して外を向いた明けつろげの喜びなどではなく、むしろ主観性が強く、強風にあおられての自己試練の場を見せられている音楽という感があります。そうみれば、有名な第2楽章の深い悲しみの声も、他の部分と強く結びたものとしてきかれるわけです。

ベートーベン

すから、音楽的にも劇の気分の予告という点でも、古いものがびびたりしなくなるのは当然ですが、それにしてもほぼ同じ時代にイタリアではロッシーニが一つの序曲をあっという間に使いこらしていたのを思い合わせると、序曲というものの考え方のあまりの大きな違いに驚かされてしまいます。

この第3番は1806年、ベートーベン35才のときの第1回改訂上演のため、その年の初めに書かれました。「フィデリオ」のために用意された序曲のうちでは最も美しく整ったもので、劇中のアリア、トランペット信号などを折り込んで劇の内容を示しながら、歌劇の序曲という通念をこえた交響詩的威容を備えています。

バレエ全体は序曲、導入曲のほか16曲を含むかなり大きなものですが、今日きくことができるのは序曲だけです。曲はゆったりした序奏のあとに生き生きとした主部が続きます。格別内容に重みのある音楽ではありませんが、開幕気分を盛り上げる効果はじゅうぶんある作品です。

ロッシーニ

ロッシーニはまだ31才という若さにもかかわらず、これが33曲目の歌劇作

品になります。14才の時から歌劇を書き出し、1年間に4曲ぐらいは軽くこなしたロッシーニは、ペンも軽ければ音楽も軽いというタイプで、時代をこえて残るほどの作品はいくつもありませんでした。この「セミラーミデ」もイタリアではまだ捨て去られてはいませんが、そのほかの国ではほとんど序曲しか知られていません。

しかし、この歌劇はベネチアで彼ったひどい悪評を覆すべく、大いに発奮したロッシーニが33日で書いた非常な力作だったのです。音楽は必ずしも全曲充実しているとはいえませんが、ともかく起伏に富んでいて、ロッシーニのねらいどおりベネチアを制圧し、そのあと外国でも非常な成功を収めることになりました。

歌劇は除謀、殺人を扱ったオペラ・セリアで、序曲もオペラ・ブッフア

■交響曲 第5番 変ロ長調 D.485

作者自筆の楽譜に記されたところによれば、この曲は1816年9月に書き始められ、完成は10月8日です。シューベルト19才の年です。このころシューベルトは父の学校の助教員をして、豊かでない地区の子供たちを教えていました。これが当時のシューベルトの公的な職業ですが、音楽の才能はもうとうに開花しており、おびただしい数にのぼる作品のなかには不朽の名曲が含まれています。彼の心中に大きな音楽家を夢みる気持ちがなかったわけではありませんが、社会の表通りに躍り出られる境遇も環境も彼にはありませんでした。音楽がすみずみまで浸透したウィーン街のいちぐうで、彼は小市民の一員としてその世界を満ちている微妙切実な哀歎を音楽にとらえて成熟していきます。

この作品も交響曲という名を持つものの、声を大にして晴れの舞台で自

■交響曲 第7番 ハ長調 D.944

シューベルトの最後の交響曲ですが、「未完成」と番号順が入れかわっているのは埋もれていた「未完成」がのちに発見されたからです。1828年3月という作曲開始の日付が楽譜にあり、完成日は不明ですが、この年の11月19日にシューベルトは他界しました。

この作品の真価を発見したのはシューマンで、初演に先立つ練習の段階でクララ・ウィーク(翌年シューマンと結婚)への手紙のなかで、初演後

のそれとは違って大きな規模を持ち、ロッシーニの歌劇の序曲としては最も手ごたえのあるものに属します。

初めに置かれた序奏は大きく、この部分からすでに歌劇のなかの旋律が用いられていますが、歌劇の内容を強く予告するという書き方はなされていません。全体を通じて、19世紀初めのころのイタリアの聞き手にとって最大の魅力であった輝かしい旋律美、それにロッシーニ固有のはつらつとした音楽の活力となめらかな弁舌、それに巧妙な管弦楽法の妙味といったものが、彼としては異例の大きな構えで繰り広げられており、歌劇本体と切り離されてそれ自体でイタリア管弦楽曲としての魅力をじゅうぶんたんのうさせる佳品です。

シューベルト

作を世に問うというつもりで書かれたものではなく、仲間うちで楽興のひとときを過ごすのが目的であったようで、完成されて間もなく、友人であるハトウィッチというバイオリニストの家で演奏されたようです。そのオーケストラの団員の大半はアマチュアだったそうで、楽器の種類も限定されたのか、小さな編成で書かれています。なお、この曲のその後の演奏記録は見当たらず、公開初演はシューベルトの死後45年、ロンドンの水晶宮においてでした。半世紀あまり埋もれていたことになります。

曲の形は古典的な四楽章、楽想力滞ることなく流出したようにみえる流麗優雅なもので、意欲的に新境地をねらったところはありませんが、感情のこまやかな揺れようは、おのずとにじみ出た明確なシューベルトの個性です。

シューベルト

「新音楽雑誌」で、「天国のような長さ」ということばをまじえて賛辞を呈しているのは有名なです。そこに至るまでには次のような曲折がありました。曲はウィーン楽友協会に提出されたのですが、音楽家たちが作品の長さ、第4楽章でのバイオリンの技巧上のむずかしさに文句をつけ、1828年暮れに予定されていた演奏は流れてしまいました。シューベルトは最後のほんの短い時期を、兄フェルディナントの家に住み、そこで亡くなりましたから、

楽譜はほかの遺作とともにそこに死蔵されていました。10年後、ウィーンにაცოგაれ、そこに住んだ2人の大音楽家(ベートーベンとシューベルト)に大きな敬意を抱いていたシューマンはウィーンに来てフェルディナントの家を探し当て、そこでこの曲を見出します。驚喜したシューマンは楽譜をライブヒに送り、友人メンデルスゾーン指揮のゲヴァントハウス管弦楽団により1839年3月21日に初演されました。しかし、シューマン、メンデルスゾーンらの賞賛をよそに、しばらくの間はこの曲は演奏者に不評であったらしく、各地でオーケストラの反感に会っています。

■交響曲 第8番 口短調 D.759 「未完成」シューベルト

なぞに包まれた作品です。まず何故未完成で終わったか? 作曲の行き詰まりとする、純粋に芸術的理由を挙げた論が近ごろは有力のようですが、これも論者の推測であって、確証に基づく議論ではありません。結局不明としか言いようがありません。

またこの曲は1822年10月30日(作曲者25才)に着手し、未完のままヨゼフ・ヒュッテンブレンナーに送られ、さらにヨゼフは弟のアンゼルムに渡し、そこで43年間眠っていましたが、なぜシューベルトが書きかけの交響曲など他人に送ったのかわかりません。このヒュッテンブレンナー兄弟はグラーツのシュタイアーマルク音楽協会と関係があり、しかもシューベルトはこの曲を書きはじめた半年後にその協会の名譽会員に推されて、「作曲中の交響曲をお礼に送り返しましょう」と協会の委員に礼状を出しているものですから、未完成交響曲はどうしても協会への謝礼作品とされたのだと考

■円舞曲「南国のばら」 作品388ヨハン・シュトラウス

シュトラウスは自作のオペレッタから旋律をとって独立したワルツをしばしば作っていますが、これもその一つで、1880年に初演された喜歌劇「女王のレースのハンカチーフ」によっています。ワルツもまた同年の作で、

■アンネン・ポルカ 作品117ヨハン・シュトラウス

1850年代初めのころ(シュトラウス25才から28才)の彼の多忙さは驚くべきもので、おびただしい数の作品を生むかわたら、ドイツ諸都市を演奏旅行しており、ついに1853年には過勞で倒れてしまいました。その忙しさ

不評の原因の一つであったこの曲の長ささは、たしかに当時はベートーベンの第9交響曲を除けば異例のものであったでしょう。しかしその大きさはベートーベン流の強い全体的見通しによって構築されたものではなく、音楽の生成、変化、反復、流動の魔法のような美に魅せられ、まるでその魔力の命令のもとにおののくようにペンを走らせ作曲したとき、シューベルトが確実につかみとった必然的な形姿で、そこにどんなにすばらしい靈感と確信があったかは、ずっと後になるまで容易に理解されなかったのです。

えたいところですが、これもそうだと決めつけるそれ以上の証拠がないうえ、謝礼に半ばものを送るのは少しおかしい、ということでやはりいままって謎のままです。

このように作品の周辺は不可解なことだらけですが、まるでそのようなもやもやをすべて消散させるようにくっきりとしているのがこの曲の比べものないユニークな性格です。心の深淵を領有する暗い陰うつなもの、光を探り求めようとするაცოგაれ、そういうものの見出し方と表現の仕方とは、ふつう抒情といわれることはをはるかに超えて、恐怖を感じさせるほどの深みに達しています。

なお、この曲が初めて鳴ったのは1865年の暮れ、自筆譜が前記アンゼルム・ヒュッテンブレンナーのところにあることを知って、それを巻き上げてきたヘルベックの指揮によってでした。

これはイタリア王ウンベルト一世にさげられました。aus dem Süden(南の)という題名がそのことと関係があるのかどうかはつづらからではありません。

のさなか、1852年にこの曲は作られました。曲題はアンネンザールでの僅しものために書かれたことによっています。

■皇帝円舞曲 作品437ヨハン・シュトラウス

1888年の作曲。シュトラウス63才で、すでにウィーンの名士として落ち着いた日々を送っていました。ブラームスとの有名な交わりが生れたのもこのころです。

ところでこの年は皇帝フランツ・ヨーゼフ即位40年に当り、その祝賀大舞

踏会が宮廷で催されました。この曲はそのために用意されたもので、シュトラウス自身が指揮したことはいうまでもありません。その場のふんい気を遠い現代に伝えるにじゅうぶん力をもつ作品です。

■常動曲 作品257ヨハン・シュトラウス

前2曲よりだいぶあとの1862年の作。このころシュトラウスは宮廷舞踏楽長の地位を得ています。曲には「音楽の冗談」という副題があり、終わってからまた初めに戻って何回でも繰り返されるようになっています。とい

うわけ一度演奏してくると聴衆の方を向き、「以下同様」と言って終る指揮者もあります。

■ピチカート・ポルカヨハンおよびヨーゼフ・シュトラウス

珍しく作曲年代の判明しない作品ですが、兄弟の合作ということ、弟のヨーゼフが紡績工場の技師からこの世界に入ったのが、前曲に書いた兄ヨハ

ンの過勞で、急ぎ々楽団の指揮に立たされたときのことですから、それ以後、たぶん1850年代半ばと思われるす。

■喜歌劇「こもりり」序曲ヨハン・シュトラウス

19世紀中ごろバリを舞台にオフペンバックによって隆盛をみたオペレッタは、たちまちよりよい住み家を安逸のウィーンに見出し、ウィーンは今世紀初頭までオペレッタの中心地になります。今年生誕150年に当るワルツ王ヨハン・シュトラウスは持ちまゑの限りない旋律発明力と大衆に訴える音楽の質をこのジャンルに投入して16曲のオペレッタを作曲しました。「こもりり」はその第3作、59才の時の作品で、彼の代表作であるばかりでなく、ウィーン・オペレッタの王座を占め、ウィーンでは絶えず上演さ

れ続けており、この年末年始には国立歌劇場と国民歌劇場とが同じ日にこれを上演していたはどです。

序曲は劇中の旋律を自由につなげて作られていますが、筋書きを知らないときいてもつまらないというものではありませんから、物語りは省きましょう。旋律が美しいうえにその配列がうまく、しかも全体がまごうかたないウィーン趣味に覆われていて、これ自身体りばに独立できる傑作序曲です。

■交響曲 第1番 短調 作品68ブラームス

これほど生みの苦しみの長かった交響曲は珍しいでしょう。22才の時作曲を思い立て第1楽章だけに7年はど費やし、残りは30才を過ぎて本格的に取りかかり、43才の1876年に全部ができあがったというのですから、驚くべき執念と根気です。もちろんその間、ブラームスはこの曲だけに携わっていたのではなく、たくさんの仕事をしていますが、交響曲完成の念願を放棄したことはなかったようです。

古典は尊いとするのがブラームスの信念で、周囲の急進的なロマンの音楽家たちの歩む道は危険な邪道であり、恐らく畏れを知らないディレッタ

ンティズムのようにさえ思っていたことでしょう。そんな彼が交響曲の頂点と仰ぐことのできるベートーベンの作品のようなものを自分もと考えるのは当然ですが、ベートーベンが登り詰めてしまったところへ、同様の道筋でいきなり執念と根気です。もちろんその間、ブラームスはこの曲だけに携わっていたのではなく、たくさんの仕事をしていますが、交響曲完成の念願を放棄したことはなかったようです。

この交響曲にはその苦心のあとが深く彫りこまれています。第1楽章と第4楽章の両わくはとくに力こぶが入っており、語ろうとするものも深く痛切で、組み立て方もたいへん入念です。それに対してその間にはさまれ

■交響曲 第4番 ホ短調 作品98

交響曲を書くという難問を20年あまりかかってようやく第1交響曲で解決したブラームスは、その後はだいぶ楽に交響曲の制作ができたようで、第2交響曲は第1番を追うようにしてできあがり、少し間を置いて第3番が作られるとすぐ次に第4番といったぐあいです。この第4交響曲の完成は1885年、作曲家52才の年で、作曲は前年とこの年の夏の休養期で、ウィーン南西の静かなミュルツシュラクで行われました。

この交響曲の特色は全曲に深い憂愁の味が漂い、いかにも人生の秋を思わせる情緒をもっていることです。待符をはさみながら行方もしれぬように歌われる詠嘆の色濃い冒頭主題は、この交響曲を貫く基本的な気分を完全に象徴しています。第3楽章だけは少し性格が変わっていて、明るく、悦楽的な気分さえ感じられますが、一説によればここは最後にできあがっ

■バイオリンとチェロのための 二重協奏曲 イ短調 作品102

1887年の夏、1か月ほどの短い期間で作曲されました。ブラームス54才の時で、彼がオーケストラの楽譜を書いたのはこれが最後です。ブラームスと大バイオリニスト、ヨアヒムとの親交は広く知られていますが、当時2人の間には誤解がもとでもう7年近くもみぞができたままです。この曲はその不和を何とか解消したいという切実な願いのもとに立案されたもののようです。親しい友人の、あるものは他界し、あるものは以前のようには心を許せなくなっていたころですから、ヨアヒムとの復交はいっそう痛切な望みだったに違いありません。

うまいがいにヨアヒムは計画に賛同してくれて、例によってブラームスはヨアヒムの忠告を求め、ヨアヒムはそれに応ずるという協同作業が始まりますが、これもいつもの例にもれず、ブラームスは決してヨアヒムの忠告をそのままには受け入れない頑固さを示します。意見を提供したのはヨアヒムばかりではありませんでした。名チェリスト、ハウスマン、そしてクララ・シューマンとも関与しています。

た中間の二つの楽章は、ぐっと穏やかにロマンチックな気分を表明しています。このようにしてブラームスはやっと自分の交響曲の存在意義を確信することができたのでしょ

.....ブラームス

たのだそうで、そうすると作曲者は対照的に性格の部分の置き方に、わりまで苦心したのかも知れません。

この曲の最も有名なところは第4楽章で、ブラームスはここで古くバロック期に盛んに行われたバスカリアの形を使っています。最初の8小節の主題が32回変奏されてゆく形です。主題そのものも古めかしく、徹底した復古趣味ですが、変奏全体を流れるきわめて主観性の強い情感の色合いは著しくロマン的で、この二つの相反するものが、強い意志とみがかれ抜いた職人的技術によって結び合わされているところに、私たちはブラーム固有の作風の一つの頂点を見ることができます。この古典的なものとロマン的なものとのぎりぎりの接点で、ブラームスの交響曲は幕を閉じることになりました。

.....ブラームス

バイオリンとチェロとを独奏楽器とする協奏曲は古典派以降はたいへん珍しく、それだけにさまざまな意見が飛びかかったものと思われま

す。曲は三楽章、前にピアノ協奏曲第2番で四楽章の協奏曲を書いているのに、ここではブラームスは協奏曲本来の三楽章仕立てに戻っています。それはたぶんこの曲を交響曲的な姿から遠ざけて純粋に協奏曲として書きたかったからでしょうが、でき上りは華麗な協奏曲の姿をまったく持たない淡い音楽になりました。独奏部の技巧はやっかいなものであるのに決して雄大な感じにはいかないのです。ブラームスはもう外面的に華やかだ音楽を書くペンを持ていなかったのです。この曲の魅力は地味と渋さの奥に深く隠されています。

なおクララ・シューマンは独奏者2人の呼吸がよく合っていないとどうにもならないと感じ、その点の困難で将来の需要の少ないことを予測しましたが、今回のように優れたオーケストラの気心のびつり合った楽員によって受け持たれるようになれば、それは理想的な解決法を得たことになります。

最後に二人の独奏者について略歴を記しておきましょう。

バイオリンのライナー・キューヒルさんは1950年、低地オーストリアのワイトホーフェン近郊の生まれ、14才でウィーン的高等音楽院に入学、1971年にウィーン・フィルと国立歌劇場のコンサートマスターに就任し、ウィーン・フィル初まって以来の最も若いコンサートマスターとして注目されました。

■交響曲 第9番 ホ短調 作品95 「新世界から」

オーストリアでブラームスとブルックナーが二様の交響曲体系を作っているころ、フランスにサン・サーンス、フランク、ロシアにチャイコフスキー、そしてボヘミアにドボルザークがそれぞれ独自の国民の色合いの濃い一連の交響曲を作っており、19世紀の60年代から90年代初めにかけては広い範囲に交響曲の名作が生れています。

この「新世界から」は1893年5月23日（作曲家51才）の完成で、およそ4か月の仕事です。初演はその年の暮れ、ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団で行われました。ドボルザークがニューヨークの国民音楽院院長を引き受けて、この大きな都会に上陸したのは前の年の秋、その後

■舞踊組曲「火の鳥」(1919年版)

4年ほど前、88才で亡くなったストラヴィンスキーが、今世紀私たちの目の前で活動していった作曲家のうち、最も多様かつ重大な作品を残した人であることはいうまでもありません。「火の鳥」は1910年、彼の28才の時の作品で、このころドビュッシー、シェーンベルクなどもそれぞれ新しい音楽の道に踏み込んで独創的な仕事ぶりをみせていますが、一般聴衆を巻き込んで強い印象を与えたという点になると、断然ストラヴィンスキーが他を抜いています。もっともそこには「火の鳥」が一般に理解しやすいわくの中で新しいという性質をもっているためもあるのですが。

「天才を発見する天才」と言われたロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフは、ストラヴィンスキーの手腕を見抜き、大胆にも当時まだほとんど名の通っていなかったストラヴィンスキーに、パリ公演のための作曲を依頼します。それを名譽としたストラヴィンスキーは歌劇作曲を中止して、

彼は16才のときから独奏者としても活躍、また1973年にはウィーン・フィルの仲間たちと「キューヒル弦楽四重奏団」を結成、今日に至っています。

チェロのローベルト・シャイワインさんは1935年、ウィーンに生まれ、高等音楽院卒業後、1957年、国民歌劇場の独奏チェリストとして契約、1960年にカラヤンが彼を国立歌劇場に招き、62年にはウィーン・フィルのメンバーに加わりま

.....ドボルザーク

ったのですが、さまざまな人種が群れ集まって目まぐるしく動きまわっている街や港の風景は少なからず彼を驚かせ、ある種の感動さえ与えたようです。このニューヨークでの強烈な体験、つまり自分の外部に満ちる活力あふれる風景に打たれる彼と、それに同化することができず、一歩身を引いて心の中に故郷を抱き続ける彼と、その二つのものがこの交響曲のテーマであり、その故郷にこそ、「新世界から」という報告的副題が適当と考えられたものと思われます。第1、第4楽章は明らかに彼を圧倒したにぎやかさの印象を伝えるものであり、第2、第3楽章がそれぞれ黒人霊歌やインディアン

.....ストラヴィンスキー

の舞曲からのインスピレーションに郷愁が折り重なってできあがっていることもらは確実です。ペテルブルク（いまのレーニングラード）でこれを完成しました。題材はロシア民話により、音楽にはロシア民謡を投入します。しかし彼はパリにこれを持ち出して異国趣味でひとの耳をくすぐろうというのではなく、ヨーロッパの感覚、感情の倦怠、観念の過剰のなかに、音楽の根源的、原始的な生命感の力とすばらしさを持ち込もうというわけです。ストラヴィンスキーはそれを飾りムスキー・コルサコフから受け継いだ管弦楽法をいっそう大胆に押し進めた強い色彩と、鋭く烈しいリズムで表現しました。そしてこの初演は後の「春の祭典」で巻き起こったような大騒ぎもなく、見事成功をかちえたのでした。

作曲家自身編んだ組曲は1919年のものと翌20年のものと2種ありますが今夜の演奏は1919年版です。

ウィーン・フィルハーモニー

有馬 大五郎

南アルプスの方言に、ツープバッセン (Zubipassen) ということばがある。ツープとは、その方向にという意味で、バッセンとは、合わせるという意味である。恋人同志が、腕を組んで歩くときに歩調を合わせる、立ち止まっているときも恋人たちはピッタリと寄り添っている、すなわちツープバッセンである。このツープバッセンこそ、ウィーン・フィルハーモニーの身上である。正確に演奏すること、また出しをそろえることは一流オーケストラならできることである。だが、このツープバッセンだけは、ウィーン・フィルの特徴である。幾百年にわたって、1人が歌えば、他がすぐそれに応じて答えるという民族の中から、百数十人が集まって、百数十年かかってオーケストラをつくってきたのである。

ウィーン・フィルハーモニーと称せられる団体は、百数十年前からあったのだが、管弦楽ができたのは、ハイドンが第1交響曲を書き始めたところからであろう。ハイドン、モーツァルト、ベートーベン、シューベルトというふう自然に、時代の要求とともに、つくられてきたもので、人間が母国語をしゃべるように、母国の音楽を奏しなから、今日に至ったのである。

ウィーン・フィルは、そのままつくり、ウィーン・オペラのお抱えである。いったんオペラ劇場から出て、ウィーン・フィル団員となると、彼らは、デモクラシーの社会をつくっている。仕事を与えるのも彼らならば、その仕事を受けるのも同人の彼らである。そうして、1か月に1回、土曜の午後と翌日曜の昼に、フィルハーモニーの定期演奏会を、自分たちで選んだ指揮者によって行っている。それを予告するポスターなどはつくりませんが、いつも売り切れである。

フィルハーモニーの演奏は、ちっともよくないという指揮者がいれば、それは、彼らから招かれていない指揮者である。独奏者、評論家が、ウィーン・フィルを悪く言ったときも同様の理由である。

フィルの同人は演奏会の客席にだれが居るかということをよく知っている。目と目であいさつをする。一定の席に、その人が居なければ、病気ではないかと心配をする。会員同志も、隣席がだれであるかを知っている。そうしてお互いに、舞台でも、客席でも、熟知している音楽を味わうのである。

ウィーン・フィルはよく旅に出る。そのときは、定期演奏会はお休みで

ある。それなのにオペラはお休みでない。それは彼らの秘密である。

この管弦楽団が、いつごろから始まったかを調べてみたら、いくらかでも、その昔に帰れるのだが、昔の指揮者の名は、フランツ・ラハナー(1842)、オットー・ニコライ、カール・エッケルト(1860)、オットー・デソフなどが挙げられる。オットー・デソフの指揮で1860年、ウェーバーの「オイリアンテ」序曲、ベートーベンのピアノ協奏曲第4番(ソロはエプシュタイン)、そしてシューマンの第3交響曲が演奏された記録がある。そして、1877年に同じくデソフの指揮で、ザルツブルクに出始めている。

次の時代は、ハンス・リヒターが指揮をしたので、ワグナー、リスト、ブラームス、ドボルザークなどが上演されている。本世紀に入って、ドビュッシー、レーガー、シベリウス、R・シュトラウスなどの作品が上演されたのであるが、保守的なウィーン人には初めのうちは受けていない。その他の新しい作品はほとんどと言ってよいぐらいに消えている。ブルッフのバイオリン協奏曲ぐらいがからうじて生き残った。有名な評論家エドワード・ハンスリッヒは、ウィーンのお客の進歩の程度を評して、CONSERVATIV がKONSERVATIVになった文字のはじめで、CがKに代っただけだと言っている。

前世紀と本世紀の転換期には、G・マーラー、ワインガルトナー、さかのぼってハンス・フォン・ビューローなどが、ウィーン・フィルの対象であり、第二次世界大戦にかけては、R・シュトラウス、その愛弟子クレメンス・クラウスがいた。

音楽以外の、ウィーンの分野では、アルトゥール・シュニッツラーやジークムント・フロイトなどが活躍したところである。

ウィーン・フィルだけではなく、オーケストラというものは、100年前には指揮者のなかったもので、第1バイオリンのトップが、テクニク上の合図をしたものであった。だから、コンサートマスターと称するのである。合唱のあるような大曲だと、ピアノが添えられて、コンサートマスターとともに合図をしていた。インスピレーションを与えるために、今日の指導者が考えられてきたのは、ウィーンでは1812年ごろ、ライプチヒで1817年(カール・マリア・ウェーバ)、ロンドンで1819年(ルイ・シュポア)な

どが最初であって、いわゆる、オーケストラに音楽をさせる役割ができたのである。この両者がうまくかみ合わない困るのであって、次のような、逸話が伝えられている。

オペラ劇場から、音楽会場に行く途中で、ウィーン・フィルのメンバーに出合ったので、彼にその友人が、「今日のフィルの演奏会の指揮者はだれか」と尋ねたら、「指揮者は知らぬが、われわれはエロイカをやるのだ」と答えた。

フィルの練習に、若い指揮者が演奏を止めて、いろいろと注文をつけるので、腹をたてたメンバーの1人が立ち上がり、「もう一度止めたら、あなたの指揮棒のとおりに演奏してやるぞ」となった。

フィルのバイオリンの1人の述懐として、「私はブルックナーの交響曲5番を演奏していたが、ウトウトと眠ってしまった。やつと気がつくとき、やはり、ブルックナーの5番を演奏していた。

少し乱暴な彼らの発言であるが、その余裕はうらやましい。

G・マーラーの病氣を受けて、フランツ・シャルクやワインガルトナーが出てきたし、ヘルムスベルガーの病氣を受けて、フェリックス・モットルや、R・シュトラウスがこのオーケストラの前に現れた。リヒャルト・シュトラウスは、今日、近世を代表する作曲家である。その出発期は最高級の指揮者であり、ピアノ伴奏者であった。

ヒットラーが現れた。シュトラウスは、ドイツ人であったから、彼はあらゆる機会に、ナチスによって祝福された。彼にとってははなはだ迷惑であつたらしい。あるウィーンの家で、彼があいさつしたときに「英国ではTHE KING」と言えば通じるところだが、ここでは「DIE PHILHARMONIE」と言う」と述べた。「ハイル・ヒットラー」と呼ばなかったところに彼の気骨を感じる。

さて前述のように、ウィーン・フィルは、オペラ勤務の余暇を利用して、

定期演奏会をする。それは、土曜の午後と、日曜の昼間である。両方とも練習といってもよいし、音楽会といってもよい。あまり練習というものを書ばない。演奏曲目は、指揮者も熟知しているし、フィルのメンバーも熟知している。指揮者は、ウィーン・フィルを熟知しているし、ウィーン・フィルは指揮を熟知している。そこでの練習というものは単きょう者のすることである。何とまあ、天下無敵であることよ!

G・マーラーにつづいてウィーン・フィルの前に現れた指揮者には、ブルーノ・ワルター、ウィルヘルム・フルトヴェングラー、エーリッヒ・クライバー、オットー・クレンペラーなどがある。ワルターはベルリン人だが、ウィーンのハートを持っている人で、ウィーン・フィルは100回以上も指揮をしている。しかし、シャルクのように、ウィーンの常任にはならず、偉人マーラーの弟子として、その影に寄り添っていた。そうしてウィーン・フィルを愛していた。「オーストリアの最高の輸出貿易品は、ウィーン・フィルである」といっている。

フルトヴェングラーは、1927、8年にウィーンに現れた偉大な指揮者である。作曲者の心を聴き、そのままをオーケストラの響きに移しうる芸術家である。この人もウィーン・フィルを好み、ひんばんにウィーンに來た。

この人の指揮は非常に複雑で、音の出しがきわめてあいまいである。オーケストラが彼の指揮棒を見ていると、彼らが入るところがわからなくなってくる。ベルリン・フィルは「彼が棒をおろすその右腕と、譜面台とが、45度の角度になったときにオーケストラが入ればよい」と言う。ウィーン・フィルは、「待っても、待っても、待っても、棒がおりて来ないのでついにばかばかしくなってきたときにオーケストラが入る」と言う。

トスカニーニという人も、ウィーン・フィルを指揮した。この人はかんしゃく持ちで、オーケストラに命令する不愉快な指揮者であったが、ウィーン・フィルだけは「ウィーン・フィルを高く評価し、愛することを知った」とほめている。音楽の記憶力の強いことでは、すばぬけていた。

フィルハーモニーの季節

前田 昭雄

演奏会直前にファゴット奏者が、トスカニーニの楽屋に駆け込んで、その楽器がこわれたことを報じ、これではes(変ホ)の音が出ないと訴えたら、ちょっと考えたトスカニーニは「貴君の今夜の演奏にes音はない」と答えたと言う。

ウィーン市立公園に、有名なヨハン・シュトラウスの像がある。日本人はウィーンからの便りに、よくこの絵葉書を使用する。それは、1921年に、アルトワール・ニキシュの指揮で、ウィーン・フィルが除幕した。当人のヨハン・シュトラウスは、ただ1回だけ1873年、ウィーン・フィルを指揮している。しかし、ウィーン・フィルが外国に出たときはアンコールに「美しく青きドナウ」を使う。また毎年、ウィーン・フィルは、舞踏会を催すが、ここでの開演に、時の指揮者が、ドナウ・ワルツを奏することになっている。その指揮者の1人に今回のカール・ベームもいた。

クレメンス・クラウスがウィーン・フィルの新年音楽会を、正月に開催するようになった。彼の後継者がボスコフスキーである。いずれも、ヨハン・シュトラウスを中心にした曲目である。

カラヤンがやって来た。最初のうちは、ウィーン交響楽団の常任となり、目をみはるような成績を収めて、ウィーン・フィルに対抗したが、ついに指揮者の本望であるウィーン国立歌劇場、フィルハーモニー、ザルツブルク音楽祭の三つを手中におさめた。一時、彼とウィーン・フィルとの因縁が続いた。

ウィーン・フィルのメンバーはもの優しい人間ばかりであるが、音楽に関しては、識見を持っている。指揮者の登壇に際して、立ち上ってこれを迎えない。彼らは誇りを持っている。好きな指揮者だけに礼を尽くす。

ウィーン・フィルのホルンは、今日、われわれが使用している楽器と違って、吹き口も大きい。そこでよくシャクリをする。それでもウィーン・フィルは改善された楽器を使わない。この昔の楽器の方が、よい音だからである。シャクリしなかったら、ごほうびである。

ウィーン・フィルの弦楽部は、際立って美しい。その弦楽器をよそのオーケストラに持たしてても美しくならない。楽器のせいではない。ウィー

ン・フィルが音楽することで美しいのである。すなわち、合奏の妙、ツェンパッセンである。

このオーケストラが、世界最高の楽団であると言い切った人がある。1人は、あの不機嫌な、オットー・クレンペラーである。もう1人は、リヒャルト・ワーグナーである。

国立音楽大学学長、NHK交響楽団副理事長



3月も半ばの声をきけば、ウィーンの空にも春の気配が漂ってくる。復活祭待ちの、夢のような季節だ。やさしい旋律のウィナーリートが歌っている——「ジューヴェリングの向こうでは、もうフリーダーが咲いたってね、きこえるかい？ 感じるかい？」

心に聴き、肌を感じる淡い春の予感。ジューヴェリングといえばウィーン南郊外の酒どころ。明るく穏やかな森の斜面に、ぶどう畑もひらけている。さりげなく立ち並ぶ民家の間に、あんなつかしいリラの花を咲かせて、フリーダー(ライラック)の茂みがほのかに見える。新緑まだ浅い森の小径を、通って高台に足を運べば、ウィーンの西南をとり巻く広大な森と、その先の限りない小麦畑までが見通せる。暢びやかさが心にしみる、シュェペルトの風光。そして北の方には、ドナウの流れも遙かに望める。

河岸の早春もすばらしい。プラーター公園の片すみ、ホイシュタードルヴァッサー(乾草の池)のあたりに人影もなくて、淡い日のもとで緑への期待がひっそりとまどろんでいる。シュトッケラウの平坦な岸辺に、やがてすずんがっぱいに咲くだろう。そのうちにフリーダーはまちの中心まで進んで、オペラの前のリンツシュトラッセ(環状道路)にも、宮廷公園のモーツァルト像にも、やわらかな風が吹きよせる。カスチニエンの白の花、フリーダーの紫、そしてあの全市にもえる贅沢な緑。たけなわの春を楽都の全体が呼吸する。そびえたつドームの尖塔が、居並ぶバロック建築の青銅の円蓋が一斉に薫風を吸いこんで、何百年の芸術伝説にいちばん不思議な現代性がよみがえってくるのは正にウィーンのこの季節なのだ。

そしてまたこのころには、音楽祭の開幕というシーズンのクライマックスが控えている。このころのウィーンの弦が、「blühenする」(花をひらく)といわれるのも、けっして単なるたとえではない。楽器は人間より、気候風土に左右される。しかしまた逆にウィーンの春は、「バイオリンの音が空にいっぱい」と表現されるように、この音を咲かせてこそ、ふくいくと薫る。実際、ウィーンの弦の芳醇な響きが楽友協会の堂に満ちるとき、心ときめくのが正にこういう感じなのだ。響きは音楽をこえて、文化風土の豊麗な全体を、この一瞬に浴びせかける。ウィーン・フィルの名演が与える総体的な、長持ちのする、一種独特な満足感はこちらから来るのだと思う。

それは単なる技術や音の美しさを超えて、そのうしろにあるものに向けて窓がぱっと開いた時の、「やっぱり！」という感じなのだ。今あるものと、背後にあるものとが等質で連続していることの実感——それはまた人間が何百年かけて培ってきた音楽文化を、ことばでなく感覚でありありと聴きとる、その安心感と充足感につながる。

ウィナー・フィルハーモニーをさして、人は名門中の名門と呼ぶ。創立は1842年だから、ベルリン・フィル(1882)やコンセルト・ヘボウ(1888)より40年も古い。しかもこれは近代的な自治団体としての歴史で、宮廷楽団としてのそれまで何世紀もの伝統は度外視している。けれども古さだけでいうなら、ライプチヒのゲヴェントハウスのほうがさらに半世紀は古くて、1840年ころにはメンデルスゾーンという史上初の「名指揮者」のもと、すでに黄金時代を築き上げていた。しかしそのライプチヒからシューマン夫妻がウィーンを訪れて、最初期のウィーン・フィルを聴いている。1846年だから創立4年目の草分け時代で、指揮者はオットー・ニコライだった。クララの日記に、こういう一節を見つける。「楽器の音は私たちのところより、はるかに美しい」(傍点筆者)。シューマン夫妻は当時ドレスデンに居を移していたけれども、それまでのオーケストラ体験はほとんどすべて「ゲヴェントハウス」だった。またここには夫ローベルトの意見も入っているだろうことが、前後関係から察せられる。これでみると現在でもウィーン・フィル第一の宝とされる、音色の無二の美しさは、創立時代以来のものだったらしい。

下って19世紀後半となると、音楽史上の大家によるウィーン・フィル讃美のことばは枚挙にいとまがない。有名なのはペリオーズ、ワーグナーで、両方とも管弦楽の天才だ。特にワーグナーははっきりと最上級のことばを使って、「世界で最も優れたオーケストラ」と断言している。この判断、1861年のウィーンで「ローエングリン」に感涙した時の体験に根ざすところが大きいのだが、その直後のある手紙の中でワーグナーはウィーンの演奏の特質を具体的に描出して、そこに現れる基本概念が驚くほどびつたりと、いまのウィーン・フィルのアンサンブルのイメージにもあて

はまるのだ。「節度と美しさ」、「気品と力」、「強制なき秩序」、そして「心」——今の私たちだって、ほかの一流オーケストラと比較して、ウィーン・フィルの特質を言い表そうとすると、結局はこういうことばの描く円弧の外へ出ないだろう。

少なくともここには、完ぺきな技術と規律、圧倒的な力、などということばは出てこない。ウィーン・フィルにこういう条件が欠けるというのはなくて——例えばブルックナーで示される高度の技術と底力は、他の追隨を許さないものがある——こういう現代に通用する切れはほかのオーケストラにあっさり譲ってもよいだけのものを、ウィーン・フィルはとにかく持っているのだ。これは老舗の地力といった趣のものでもなくて、もっと若々しく（*juwili*）と、響きの柔軟な美しさに生きている。それがまた不思議な魅力なのだ。

ウィーン・フィルの音の、独特な美しさということについて、さらにこう考える——

いきなり目隠しをされて、演奏会場に連れて行かれて、オーケストラを当てさせられるはめになったらどうだろう。いちばんはっきりわかるのはやはりウィーンに音に違いない。弦の全体のアンサンブルの何ともいえない等質な感じに分かるだろうし、管楽器という決め手もある。なかでも分かりやすいのは、やっぱりオーボエとホルンだろうか。

まずオーボエは、形をみてもすぐ分かる。吹口の下がまるくふくらんでいて、音は逆にはっそりと、ヴィブラートも少なくしなやかで、オーボエ特有の「じーっ」というような、音色のつやも少ない。陶磁器でいうなら、うわぐすりの使い方が控えて、素朴で品よく、洗練されている。クラシックな線が美しく浮き出る反面、フルートやクラリネットとの、しっくりした溶けあい方がすばらしく、この音に一度なじむとモーツァルトなど、ウィナーオーボエでないと気になってしまう。ソロの個性が比重を増すロマン派以後のオーケストラレションだって、ウィナーオーボエの銀線のような美しさは魅力的だ。ブラームスの総検楽章ノ 昨年10月のウィーン・フィル定期でチャイコフスキーの4番を聴いた時にも、第2楽章であ

のオーボエの音色をたんのうした。あの旋律が、ほんとうに落日の光芒のように美しく透き通って、心にさしこんできたのだ。

ウィーンのホルンが特別だということは、もっと一般的に知られている。何しろこの森の楽都、ヴァルトホルンの古い伝統もさることながら、吹く人の層もきわめて厚い。オーケストラでも響きの美しさを一にも二にも大事にしたFのホルンが使われている。この楽器は新しいドイツ式に比べると技術的にははるかに扱いにくく、音が一瞬ひっくりかえる危険も大きいのだが、それにも代えがたいのはあの美しい響きで、「気品と力」というワーグナーの表現もそのままに、ふかふかとした柔らかな音で心を奪う。ブラームスの「第2」など、ウィナーホルンの表現力をぬきにしては考えられないくらいだ。第1楽章の全体、なかでもその終わり近く、コーダの前に出る天下一品のソロノ——第2楽章のホルンにも、そしてまた「第1」のフィナーレにもある、あのホルンだってそうだ！ 北の人ブラームスに、ウィナーホルンに魅せられる体験がなかったら、こういう音楽も別のものになっていたかもしれない。

しかし完全に万能な楽器はない。作品によってはウィナーホルンが美しく響きすぎることであってある。先程例にあげたチャイコフスキーの4番で、冒頭のファンファレを聴いた瞬間に、ふとその感に襲われた——「やはりウィーンだ！」という欠(持)と、「美しすぎる」という欠(持)が半ばする。しかし圧倒的な飽(持)を求めるなら、ソ連やアメリカできけばいいのだ。結局私は、この作品の今までいちばん美しい演奏をきいたと思った。ちなみにこの時の指揮はカール・ベーム。ウィーン・フィルはのびのびと音楽していた。驚くほどフレッシュな演奏だった。

あるオーケストラの演奏は、どの作品をだれの指揮で、という具体的な条件抜きにしては考えられない。現在の指揮界でウィーン・フィルから最高の演奏を引き出す第一人者といえば、だれでもベームに指を屈する。永遠に若いといわれるオーストリアのこの大家にも昨年80才の誕生日が訪れ、記念の祝典が8月のザルツブルクで盛大に行われた。私のいるスイスにも、テレビでその中継が流れた。カラヤンも親しみのこもった、機知あふれる祝辞を述べ(贈り物は精密時計)、ベルリン・フィルをはじめ世界のオー

ケストラからお祝いが寄せられた。その中でウィーン・フィルの贈り物が、さすがというかひとときわ光っていたのが印象に残る。ドクター・ベームは朝おきると、必ず体操をされるという。これを知っているウィーン・フィルは「並のじゅうたんで体操を做的是はいけません」と、高価なオリエントの狩猟じゅうたんで贈った。これをなぞとして解くなら、憎いなどではある。しかも憎めないエーモアに、ちゃんと包んでもあるのだ。

これに添えたもう一つの贈り物が、また味のあるものだった。ヒューブナー理事長の発案で、ファゴット奏者のカミロー・エールベルガー氏がお祝いの詩を捧げたのだ。氏はウィーンの情緒の詩を書かせたら、例えばジーヴェリングの風物詩など書かせたら、女人はだしの素養と腕前をもって、詩集もいくつ出版している。ウィーン・フィルのメンバーには音楽を抜きにしても、こういう芸術家が多くて、これがまた音楽の余韻をつくる一つの源になっているのだが、私が特に感心するのは、その絵なり、詩なりをみたときに、いかにもフィルハーモニーのそれらしく、しっくりした感じにできあがっていることだった。そしてどこかにウィットな味がある。

エールベルガー氏の詩がそのよい例なのだが、これを日本語に移すのは大変に難しい。まず、ことばの技巧が凝っていて、普通の韻を踏むだけではなく、各行の頭文字を続けて下へ読むと、ある意味が浮ぶようになっているのだ。初めの3行でみてみると、

Geboren……生れたのはまだ、ブラームス、ブルックナーの生きていたころ。

Musik ……音楽を万事の始め、里程碑としても

Das ……その示す道一筋に、若きベームは邁進する

左端につながるGMDはもちろん、ゲネラルムジックディレクター、つまり音楽総監督の略号だ。このあとの25行の頭文字は、

DRKARLBOEHMZUMACHTZIGSTEN

だから全体は「音楽総監督カール・ベーム博士80才に」と読み下せる。

Akrostikon と呼ばれるこのテクニクは、ベーム博士もすっかり意表をつかれて大変に喜ばれたそう。しかしウィー的なのはこの詩法では

なくて、こういう洗練された遊びの精神に結び付いた、内容の力まない素直さにある。

ベーム氏の全世界にわたる、長いキャリアを展望し、モーツァルトからベートーベン、ワーグナー、ブルックナーを経てリヒャルト・シュトラウスに及ぶ、その芸術の幅と深さをたたえたあとで、詩のおしまいはこういう引用で結ぶのだ。

“故郷はおんみを愛し

世界はおんみを敬う”

——これ以上の言葉を、私は知らない。

引用されたのはオーストリアの詩人、アントン・ウィルドガンスの詩句だ。ウィルドガンスはもとウィナー・フィルハーモニーをたてる詩の冒頭に、このことばをおいた。フィルハーモニーの詩は、専門詩人のかたわらにつつましく身を寄せて、この榮譽を指揮者へと譲る。知的な遊びの詩に、穏やかな人柄も反映して、しかもその奥にはうらやましいほどの矜持さえ、自然に流れている。

このオーケストラにして、この指揮者にして——それよりもその背後に控える、ウィーンの楽聖のイメージと、文学・美術のすべてを含めた芸術伝統と——そういう大きな全体を包みこむ、いわくいいがたいあるものがやっぱりある。それはウィーン其自然風物に、人の気質や人柄に、そしてウィーン・フィルの音楽のすみずみにまで行き渡って、あのハーモニーを呼吸している。

こういうウィーンを、私たちは敬い、また愛したいと思う。

チューリヒ大学講師(音楽学)、在ヨーロッパ

ウィーン・フィル雑感

大町 陽一郎

ウィーン・フィルが1959年、2台の飛行機に分乗してカラヤンとウィーンを飛び立つ時、空港に見送りに来た人たちはいちまつの不安を持って見送ったものであった。この40日間の世界1周演奏旅行は、バイオリンとハープをあしらった記念切手まで出しているが、もし彼らに万が一の事があったらとり返しがつかないことになる。オーストリアの宝がこのウィーン・フィルなのだからというウィーン市民の気持を代弁して、口の悪いのが、カラヤンは代りがあるが、ウィーン・フィルは世界にただ一つしかないなどと言っていたのを思い出す。ウィーン・フィルが世界旅行から帰った時は、当時のラープ首相が空港に出迎えたが、一国の首相が空港まで出迎える国がオーストリアを除いて世界のどこにあらうか？これをみてもオーストリア国民がいかにウィーン・フィルを尊敬し、愛しているかがわかるだろう。もちろん首相が出迎えるぐらいだから税関もフリーパス、そのぐらい信用というものがあるのだ。今でもおぼえているが、カラヤン夫人と秘書のマットーニのヒザが不備だという理由から羽田空港でウィーン・フィルが1時間近くも入国を待たされたことがあった。当時のオーストリア大使ライトナー氏が大声で、「ウィーン・フィルは世界のウィーン・フィルだ。調べる事があるならホテルに來い」と叫んでいたのを思い出す。ウィーンではウィーン・フィルの団員であるというだけでその信用は絶大である。銀行もウィーン・フィルの団員にはすぐ融資するし、電話帳にも「ウィーン・フィルハーモニック」と職業名がのってて、どこかの国のように「音楽家」で片づけられるような事はない。日本でいうなら東大教授というところだろうか。その社会的地位は実に高い。だから永年勤続のウィーン・フィル団員は政府より、プロフェッサーの称号をもらうことになっている。ウィーン・フィルのプログラムには、よく我が団員のだれだれは毎月何日にプロフェッサーの称号を授与された、という公示が出ている。このプロフェッサーの称号は社会的にたいへん重要で、肩書き無しで呼びかけたりしたらたいへんなことになる。それでウィーン・フィルを指揮する時にはだれがプロフェッサーでだれがドクターか、名前をいうのに苦勞するのだそうだ。ところが、このプロフェッサー連中が、夜は国立オペラでボックスに入ってオペラの伴奏をするのだから私観であ

る。今のウィーン・フィルは若返って若い人たちが多くなったが、昔のウィーン・フィルには白髪教授とした人が多かった。

私がウィーン・フィルをボックスで見したのはフルトウエングラが指揮した「ドン・ジョヴァンニ」が最初だったが、バリリ・クワルテットで有名なバリリ教授とか、クラリネットのウラッハ教授といった、室内楽でもソリストとしても有名な人たちがオーストラボックスの中にいるのをみて不思議な感じがしたものである。

ウィーン国立オペラの天井桟敷に行くと、今夜のレズニチェクのソロ(首席フルリュースト)はさえているとか、今夜の打楽器はホーホライナー(ホーホはブラボーの意味もある)だとか個人名で皆が批評しあっているのを聞いて、まるで日本でいえば今日の長島は、といった調子に感心したものである。1945年3月12日、戦争も終わりに近づいたころ、ウィーンのオペラ劇場は爆撃にあい焼失してしまったが、その時オペラ劇場の地下室にいたウィーン・フィルの団員とウィーン市民は泣きながら清水にあたったというのである。

1955年11月5日、カール・ベームの指揮のもとに国立オペラ劇場が再開された時は、こういった熱烈なファンが劇場の周りを取り囲み、寒さの中に立ちつくして、場内からスピーカーで流される「フィデリオ」に聞き入っていたのが印象的だった。狂悶、オペラ劇場の前を歩いていると、当日売りの立見席を手に入れようとするファンが行列しているのが目につく。これらの人たちはいわゆる天井桟敷の人々である。カール・ベームが総監督に任命されたとなるとたいまつ行列をしたり、下手なテノールが満足に歌えないとなるとやじり倒すのも彼らである。しかしウィーン・フィルに対しては絶対の信頼があり、指揮者や歌手がやじり倒されたのは見た事があるが、ウィーン・フィルにはいつも盛大な拍手が送られる。ウィーン・フィルはウィーン市民の誇りであり、ウィーン・フィルが海外演奏旅行に出てしまうと、その間はオペラに行かないという人もいるくらいである。ウィーン市民とウィーン・フィルの人たちが最も身近になるのは毎冬1月に催されるウィーン・フィル舞踏会であらう。この時はウィーン・フィルが文字どおり主催者で、大統領、首相、閣僚、名士が一堂に会するさま

は圧観である。会場はウィーン・フィルの本拠地、楽友協会音楽堂で、いつもの座席が全部取り払われて舞踏会場と化すのである。この音楽堂の床が水平なのはこのためだが、日本の音楽会場では勾配がついているので舞踏会には不可能だろう。ウィーン・フィルがワルツを1曲舞踏会の始めに演奏するが、ヨハン・シュトラウスがむかし宮廷舞踏会楽長だったのだからウィーン・フィルとウィンナワルツの関係は古い。この開会のワルツは歴代の名指揮者たちが指揮することになっており、フルトウエングラもやらされたというし、私の見たのでは珍しいところでは、カール・シュリヒトがワルツを振ったのを記憶している。ワルツといえば毎年大みそかと元旦の2回行われるワルツやポルカによる音楽会は、クレメンス・クラウスが指揮してウィーンのごくおすかの人たちの間でのみ演奏されてきたのだが、最近ボスコフスキーがバイオリン片手に指揮するようになってからは、全ヨーロッパにテレビで中継され始め、また世界中の人がニュー・イヤーク・コンサートをレコードで楽しむようになったのである。ウィーン市民のウィーン・フィルが世界のウィーン・フィルになってきたわけで、ウィンナワルツに酔っているウィーンの聴衆を見るにつけ、こういう楽しさを持っているウィーンの人たちは何と幸せな人たちだろうと思ったことだった。この演奏会のプログラムには「美しく青きドナウ」と「ラデツキ一行進曲」はのっていないが、必ずアンコールで演奏されることになっている。オーストリアの第2の国歌といわれるドナウ・ワルツが弦のトレモロで静かに始まるときの聴衆の熱狂的な拍手、最後のラデツキ一行進曲では手拍子を打つだけでは足りず、足踏みまでいれて会場は興奮のつぼと化するのを見ると、ウィーン・フィルとウィーンの聴衆が堅い心のきずなでしっかりと結ばれているのを感じる。こんなわけでウィーン・フィルの定期会員になるというのは実に難しい。会員の権利を「相続」といわれるほどで、新しく入会することはほとんど不可能といわれている。

ウィーン・フィルの人たちの音楽はオペラ劇場や音楽会場のみで聞けるものとは限らない。ある日、バイオリン奏者のプロフェッサーのR氏とホイリゲン行ったことがあった。ホイリゲンは、ウィーンの人たちだけが楽しんでいる独特の酒場で、毎年とれる新酒のぶどう酒を飲ませる所であ

る。たいいぶどう畑の近くのひなびた酒造りの軒先に、新酒ありますの印として小枝を束にしたものがきがついているのだが、そこで飲んでみると流しがついて来た。バイオリンにギター、アコーディオンといった編成だが、ウィーンの小唄を演奏しては客の間を歌って歩くのである。そのバイオリン弾きがウィーン・フィルのR氏を見つけて近寄ってきて「プロフェッサー、1曲どうぞ」とバイオリンを差し出した。R氏いとも簡単に受け取るときがウィーン・フィル！流しのバイオリン氏とはうって変ったすばらしい音色で、しかもウィーンの粋な小唄の一部を弾いてくれた。満員のホイリゲンのお客も、すっかり感心して聞いていたが、流しのバイオリン氏が、今のはウィーン・フィルのプロフェッサーR氏でしたというのと、盛んな拍手で、私が感心して「プロフェッサーは流しもやれるのですか」といったら、「ウィーン・フィルなんて流しの集団だよ。君、そう思わないかね」と言われた。オペラではワグナーの楽劇を演奏し、コンサートではベートーベンを弾き、ホイリゲンでは余興に流しも弾ける。これがウィーン・フィルハーモニーなのだと思いつく感じだったのである。

指揮者

ベームとウィーン・フィル=40年来の仲間

真鍋圭子

——ベームさんと是一心同体のようなウィーン・フィルについて、いささか何をお尋ねするのをおかしいのですが、あえてひと言お話しくださいませんか？

——“最高のオーケストラ”のひとつですね。(笑) 私がウィーン・フィルの指揮台に初めて立ったのが1933年ですから、もうこのオーケストラとの結びつきは40年以上にもなります。私はこのオーケストラを特別高く評価していますし、彼らも私を大変尊敬してくれています。お互いに良く理解し合って、完全に融合しています。私は世界中を歩いて指揮してきましたが、ウィーン・フィルのモーツァルト、ベートーベン、ブラームスなどの古典の演奏は、これ以上のものを想像することができないほどです。これはもちろん、長年にわたるこのオーケストラの古典に対する愛情から培われたものです。私に要求されるのはいつも古典ばかりですし、その古典を団員全部がすみずみまで知り尽くしていますから、私はこのオーケストラと演奏するときはまったく何の問題も見いだしません。私はリヒルト・シュトラウスやアルバン・ベルクなどを除いてはほとんどクラシックを演奏しています。シュトックハウゼンその他の現代曲は私は振るいません。というのも、私は左目を二度手術しましたが結局失明し、右目も一度失明しかけたのを何とか手術に成功したものの強度の近視なので、新しい譜面を初めから詳細に勉強することが困難だからです。

ウィーン・フィルの最大の特徴は向賢性だと思います。団員全部が同じことばを話すんです。これは全員がオーストリアなまりをしゃべるといふ外面的な理由ではなく、音楽的に同じことばを話すということなのです。それは世代を経て血の中に流れている長い伝統に根ざしているのですが、これはまた、彼らがいつも演奏しているウィーンの「楽友協会」の大ホールの中に響いてきた伝統なのです。このホールは単に美しいだけではなく、私にとって世界中で一番良い音響を持ったすばらしいコンサート・ホールです。そしてその貴賓席にはブラームスが、ブルックナーが、リヒルト・シュトラウスがかつては座っていたのです。R・シュトラウスの80才の誕生日を祝ったのもこのホールでした。最近私はこの「楽友協会」の名譽会員に指名されましたが、私にとってこの上なく光榮なことです。なぜなら、

今までリヒルト・ワーグナー、ヨハン・シュトラウスなどの音楽の巨匠たちだけがこの名譽を授かっているのですから。

私がまだ10才の子供のころ、このホールで初めてコンサートを聴いたのですが、そのころはまだブラームス信奉者とブルックナー信奉者が反目し合っていて、彼らは殴りあいのけんかまでしていたんですよ。私もいっしょになってやっていたがね。(笑) たいへんでしたよ、あのころは。

——それでベームさんはどちらの側だったんですか？

——私はブラームスの側。なぜかという私はマンティチェフスキーの弟子でしたからね。この人は楽友協会で長い間資料係をしていた人ですが、ブラームスの大の親友で、ブラームスの作品は全部、印刷される前には必ず彼の手を経ています。

——ベームさんは80才を迎えられた現在も、驚くほどお元気に世界中を活動的に演奏して歩いておられますが、日本への旅行はなかでも特に長いのでお疲れにならないといひのですか？

——私は健康管理には気をつけて生活しています。昔はセクト酒がたいへん好きで飲んでは薬のやっかいになっていましたが、今ではすっかりやめました。今はセクト酒もタバコもなし。毎朝20分から25分、体操したり泳いだりしています。そうしないとい人間の体は鉄みたいにさびついてしまいますからね。(笑)

私の年齢で日本への長旅はかなり難しい冒険なのをじゅうぶん承知していますが、ウィーン・フィルから今度の日本旅行の話があった時、私はその場で引き受けることに決心しました。というのも、10年前の第1回の日本旅行で私はすっかりこの国が気に入ってしまったからです。日本人は非常に勤勉であるというだけでなく、芸術の分野でも他のどの国の人々よりも成し得なかった急速の進歩を遂げた国民だからです。今度NHKの招待で、しかも私の40年来の仲間であるウィーン・フィルと日本に行けると思うと今からとても楽しみに、待ち遠しい気がします。

(真鍋圭子氏が1974年9月21日：ミュンヘン野外、パルティハイムのベーム宅で直接インタビューした時のものです。)

偉大な可能性

原智恵子にさく

——原さんは、ずっとフィレンツェにお住まいですし、ムーティがマッジョ・ムジカレ(五月音楽祭)の常任として職業上のデビューを飾ったのが1968年のシーズンというわけで、いろいろおつきあひもあろうかと存じますか？

——ええ、ムーティさんとかわいい奥さま、そして2人のお子さん、みんな仲のよいお友だちです。とても円満なご家庭で、ムーティさんも、家ではとても優しいパパです。

——指揮者ムーティさんについては、ヨーロッパやアメリカでのすばらしい評判を耳にするだけで、日本ではまだ放送やレコードでしか、その演奏を聴く機会がないのですが。

——イタリアでは、いま2人の若い指揮者が世界の楽壇に乗り出しています。1人はクラウディオ・アバード、そして、もう1人がリッカルド・ムーティです。年がらえばムーティの方が七つか八つ若いでしょうね。この二名はなにかと比較されるのだけれど、ひと言に言っておけばアバードは知的な、というか、さえた指揮者ということができると思うんですよ。それに対してのムーティは、まず人間性があり、温かきがあり、叙情があつて、それらが全部生きた音楽を作るもたになっています。

——人間性とおっしゃいましたが、それはイタリア人か。

——それとおりです。イタリア人としての人間性の強さというものでしょうね。イタリア人のよい面、たとえばリズムのよさ、温かき、そうした国民性をムーティは理想的に持ち合わせています。さっきお話に出たようにマッジョ・ムジカレの常任時代、フィレンツェにはほかにいろいろな指揮者が来て指揮をしましたが、ムーティが振るとオーケストラの音がほんとうに変わってしまうんです。なんていうんでしょう、オーケストラの音がまったく一つになるのです。

今度日本にはカール・ベームも行くそうですけど、ベームからもっともゲルマン的なものを感じていただけるように、ムーティからはラテン人のいちばんよいものを感じていただけたと思いますわ。一般的に言えばイタリア人は、ドイツ人のように「統一」をしないのですけれど、ムーティがオーケストラを一つにし、きりとさせるというのは、それだけにお目

みはらせる思いがします。もっともこれは指揮者としての第一条件ですけど、彼が若くしてこれだけになったというのは、その才能のすばらしさだし、人々に感銘を与えることができるのでしょうね。

——写真などで見るかぎり、ステージでの指揮ぶりもさっそうとしていますね。

——舞台に最初現れただけで人の心をつかみますよ。彼は。そう日本のサムライみたい。(笑) シャンとしてますよ。

——カッコーイ指揮者はスターになる。

——ええ、たしかにそうして手やホヤされてスターになっている人も少なくないわね。でもムーティはそういう人たちと同列に置かれるべき指揮者ではないのよ。とにかく、まじめな勉強家なんですよ。大都會だから、いなか町だからといって手かげんを加えることなど絶体しませんね。レパートリーを築きあげていくのも慎重で、オペラにしても年に3曲以上は指揮しないと言っています。そのかわりザルツブルクでの「ドン・パスカレ」、フィレンツェでの「ウィリアム・テル」の完全全曲上演、ウィーン国立歌劇場での「アイエタ」と、一つ一つの上演が世界の目を集めるのにじゅうぶんな意味を持っています。あまり大きなことを言うのは慣みないんですけど、私は彼こそトスカニーニのあとを継ぐ人だと思っています。

——せんだってピアノのリヒテルさんにお会いしたとき、彼も「ムーティこそ、今、最も将来の期待される指揮者だ」と言っておりました。ロストロポーヴィチさんとも同じことを言っていたらしたし、オーマンディもムーティにはいちばん信頼を寄せていると聞きました。日本へ行く前と11月にフィラデルフィア管弦楽団といっしょにアメリカの大きな都市を指揮してまわりますし、日本のあとは6月と11月末にベルリン・フィルが決まっています。その間、ウィーン、ロンドン、ザルツブルクといった調子で、もはやフィレンツェは自分のまただけに彼を縛りつけておくことができなくなっていました。ロンドンのニュー・フィルハーモニアは1年間に24,000ポンドもの赤字と停滞を救う起死回生を願って彼を首席にしましたしね。

——きっと彼は日本で、ラテン人のいちばんよいものを聴かせてくれますよ。

(原智恵子氏：ピアニスト、在ヨーロッパ)

総合テレビ

3月17日(月) 午後8:00~8:54 指揮=カール・ペーム
交響曲 第7番 イ長調 作品92……………ベートーベン
3月19日(水) 午後10:15~11:00 指揮=カール・ペーム
交響曲 第1番 ハ短調 作品68……………ブラームス
3月23日(日) 午後8:45~9:30 指揮=カール・ペーム
交響曲 第8番 ロ短調「未完成」……………シューベルト
序曲「レオノーレ」第3番……………ベートーベン
3月30日(日) 午後10:05~11:35 指揮=カール・ペーム
交響曲 第4番 変ロ長調 作品60……………ベートーベン
円舞曲「南国のぼら」ほか……………ヨハン・シュトラウス
舞踊組曲「火の鳥」……………ストラヴィンスキー
4月5日(土) 午後10:00~11:35 指揮=リッカルド・ムーティ
「プロメテウスの創造物」序曲……………ベートーベン
バイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102……………ブラームス
交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界から」……………ドボルザーク
4月10日(木) 午後10:15~11:00 指揮=リッカルド・ムーティ
交響曲 第4番 ホ短調 作品98……………ブラームス
4月13日(日) 午後10:15~11:05 指揮=リッカルド・ムーティ
歌劇「セミラミデ」序曲……………ロッシーニ
交響曲 第5番 変ロ長調……………シューベルト

ラジオ第1

3月23日(日) 午前11:00~11:55 指揮=カール・ペーム
交響曲 第7番 イ長調 作品92……………ベートーベン
3月30日(日) 午前11:00~11:55 指揮=カール・ペーム
交響曲 第4番 変ロ長調 作品60……………ベートーベン
4月6日(日) 午前11:00~11:55 指揮=カール・ペーム
交響曲 第1番 ハ短調 作品68……………ブラームス
4月13日(日) 午前11:00~11:55 指揮=カール・ペーム
交響曲 第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」……………モーツァルト
4月20日(日) 午前11:00~11:55 指揮=カール・ペーム
交響曲 第7番 ハ長調……………シューベルト
4月27日(日) 午前11:00~11:55 指揮=カール・ペーム
舞踊組曲「火の鳥」……………ストラヴィンスキー
5月4日(日) 午前11:00~11:55 指揮=カール・ペーム
バイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102……………ブラームス
5月11日(日) 午前11:00~11:55 指揮=リッカルド・ムーティ
交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界から」……………ドボルザーク
5月18日(日) 午前11:00~11:55 指揮=リッカルド・ムーティ
交響曲 第4番 ホ短調 作品98……………ブラームス
5月25日(日) 午前11:00~11:55 指揮=リッカルド・ムーティ
交響曲 第5番 変ロ長調……………シューベルト

FM

3月16日(日) 午後6:50~9:00 指揮=カール・ペーム
(ナツ中継・関東地方、甲信越3県のみステレオ)
交響曲 第4番 変ロ長調 作品60……………ベートーベン
交響曲 第7番 イ長調 作品92……………ベートーベン
3月19日(水) 午後6:50~9:00 指揮=カール・ペーム
(ナツ中継・関東地方、甲信越3県のみステレオ)
交響曲 第8番 ロ短調「未完成」……………シューベルト
交響曲 第7番 ハ長調……………シューベルト
3月22日(土) 午後6:50~9:00 指揮=カール・ペーム
(ナツ中継・関東地方、甲信越3県のみステレオ)
序曲「レオノーレ」第3番……………ベートーベン
舞踊組曲「火の鳥」……………ストラヴィンスキー
交響曲 第1番 ハ短調 作品68……………ブラームス
3月25日(火) 午後6:50~9:00 指揮=カール・ペーム
(ナツ中継・関東地方、甲信越3県のみステレオ)
交響曲 第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」……………モーツァルト
円舞曲「南国のぼら」……………ヨハン・シュトラウス
アンネン・ボルカ……………ヨハン・シュトラウス
皇帝円舞曲……………ヨハン・シュトラウス
常動曲……………ヨハン・シュトラウス
ピチカート・ボルカ……………ヨハンおよびヨゼフ・シュトラウス
喜歌劇「こもり」序曲……………ヨハン・シュトラウス
3月30日(日) 午後2:00~5:00 (ステレオ) 指揮=カール・ペーム
交響曲 第4番 変ロ長調 作品60……………ベートーベン
交響曲 第7番 イ長調 作品92……………ベートーベン
序曲「レオノーレ」第3番……………ベートーベン
舞踊組曲「火の鳥」……………ストラヴィンスキー
交響曲 第1番 ハ短調 作品68……………ブラームス
4月6日(日) 午後2:00~5:00 (ステレオ) 指揮=カール・ペーム
交響曲 第8番 ロ短調「未完成」……………シューベルト
交響曲 第7番 ハ長調……………シューベルト
交響曲 第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」……………モーツァルト
円舞曲「南国のぼら」……………ヨハン・シュトラウス
アンネン・ボルカ……………ヨハン・シュトラウス
皇帝円舞曲……………ヨハン・シュトラウス
常動曲……………ヨハン・シュトラウス
ピチカート・ボルカ……………ヨハンおよびヨゼフ・シュトラウス
喜歌劇「こもり」序曲……………ヨハン・シュトラウス
5月4日(日) 午後2:00~5:00 (ステレオ) 指揮=リッカルド・ムーティ
「プロメテウスの創造物」序曲……………ベートーベン
バイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102……………ブラームス
交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界から」……………ドボルザーク
交響曲 第9番 ホ短調 作品95「新世界から」……………ドボルザーク
歌劇「セミラミデ」序曲……………ロッシーニ
交響曲 第5番 変ロ長調……………シューベルト
交響曲 第4番 ホ短調 作品98……………ブラームス



Verehrter Herr Dr. Böhm, liebe Wiener Philharmoniker.

Es ist für uns ein grosser Tag, ein Ehrentag, Sie wieder als
Botschafter der Musik in unserem Land begrüßen zu dürfen.
Wenn wir von Wien und der Klassik sprechen, denken wir ebenso
an die grossen Komponisten wie an Sie, die lebenden Sachwalter
und Interpreten. Sie sind für uns bewundertes Vorbild,
gegenwärtig durch zahlreiche Schallplatten-Aufnahmen,
erfreut begrüßt in jedem Konzert.

POLYDOR INTERNATIONAL GMBH
POLYDOR K.K.

敬愛するペーム博士、親愛なるウィーン・フィルハーモニーの皆様

ペーム博士とウィーン・フィルハーモニーの皆様を、音楽の使者として再び日本にお迎えできることは、私達にとって記念すべきことであり、名誉なことでもあります。ウィーンのことを、そしてクラシック音楽のこ

の相續人であり、その良き解者であるあなた方が、必ず思い出されます。賛嘆すべき音楽の使者であるあなた方は、どの音楽会においても常に私達を魅了し、沢山のレコードをとおしても常に私達と共にいて下さいます。

ポリドール・インターナショナル GMBH
ポリドール株式会社

昨日のような 明日のような...

infini

アンフィニ<無限>



《香水》《バルフアンドアレ》《オードコロン》《ソープ》

CARON

PARIS

imported by KANEBO

岩間に漂う一輪の花

FLEURS DE ROCAILLE

フルール ド ロカイユ<石の花>



《香水》《バルフアンドアレ》《オードアレ》《オードコロン》《ソープ》

CARON

PARIS

imported by KANEBO

熱帯の花のひめやかな息づかい

Narcisse noir

ナルシス ノワール<黒水仙>



《香水》《オードアレ》《オードコロン》

CARON

PARIS

imported by KANEBO

いい旅は、する旅。

春からのジャルパック

新219コースがぞろぞろ

「土地っ子の旅」をさいせんか。土地っ子のすることを、あなた自身でやってみませんか。海外旅行を楽しむコツは、意外とそこらに……。さあ、どこへ行って、何に挑戦してみましょうか。ジャルパックには今年から、東欧・ソ連へ行くコース、週末に出かけてまるまる1週間ハワイにいられるコースなど、新しいタイプのコースもできて、全部でなんと219通り。目につくようにイロイロですが、あなただけの「いい旅」を、じっくりとおさがしください。

●新登場のエコノミーなら、経済的なヨーロッパ。

マイプランパリ9日間(4-10月発).....	304,000円
マイプランパリ12日間(4-10月発).....	336,000円
マイプランパリ20日間(8月発).....	359,000円
マイプランロンドン9日間(4-10月発).....	304,000円
マイプランローマ10日間(4-10月発).....	319,000円
フリータイムパリ・ローマ9日間(4-10月発).....	367,000円
フリータイムスイス12日間(7-8月発).....	391,000円
フリータイムヨーロッパ15日間(A)(4-5-7-8月発)436,000円	
JOYヨーロッパ9日間エコノミー(4-5-7月発).....	424,000円
JOYヨーロッパ13日間エコノミー(4-7-10月発).....	465,000円
JOYヨーロッパ15日間エコノミー(4-6-8-10月発)496,000円	
JOYヨーロッパ11日間(4-10月発).....	468,000円
JOYヨーロッパ13日間(B)(4-10月発).....	492,000円
スイートヨーロッパ9日間ハムーンコース(4-10月発).....	(おひとり) 398,000円
ヤングヨーロッパ20日間(7月発).....	525,000円
JOY東欧11日間(6月発).....	497,000円
JOY世界一周16日間(4-7-10月発).....	586,000円

●いつでも行けます。ハワイ・グアムは毎日出発。

マイプランハワイ6日間(6月発).....	169,000円
JOYハワイ6日間アロハコース(毎日発).....	181,000円

マイプランハワイ7日間(毎週発).....	174,000円
JOYハワイ9日間マカハコース(毎月発).....	210,000円
マイビーティハワイ6日間(7-8-5月3月発)(大人1人・子供2人).....	505,000円19
JOYグアム4日間(A)(東京・毎日発)(大阪・月・水曜発).....	109,000円
マイビーティグアム4日間ゴルフコース(東京・木曜発).....	(大阪・水曜発)おとな3人の場合) 408,000円
●カナダ行きも増えました。21.8万円からのアメリカ。	
マイプラン・サンフランシスコ6日間(毎月発).....	218,000円
フリータイムアメリカ西海岸8日間エコノミー(毎月発).....	238,000円
フリータイムアメリカ西海岸10日間エコノミー(毎月発).....	248,000円
フリータイムアメリカ西海岸8日間(A)(毎月発)268,000円	
フリータイムアメリカ西海岸10日間(A)(毎月発)279,000円	
フリータイムバンクーバー・メキシコとサンフランシスコ8日間(A)(毎月発).....	356,000円
マイプランバンクーバー8日間(6-10月発).....	258,000円
JOYカナディアンロッキー8日間(6-10月発).....	424,000円
マイプランニューヨーク10日間(毎月発).....	339,000円
フリータイムニューヨークとナイアガラ・ワシントン10日間(4-10月発).....	413,000円
フリータイムアメリカ一周16日間(8-10-11-51年3月発).....	427,000円
JOYナイアガラとアメリカ一周10日間(4-10月発)482,000円	
JOYアメリカ・カナダ・メキシコ14日間(8-10-11-51年3月発).....	631,000円
ヤングアメリカ大陸横断バスツアー30日間(7月発).....	581,000円
フリータイムアラスカ5日間(6-9月発).....	191,000円
フリータイムアラスカ7日間(7-8月発).....	196,000円

JOYアラスカ9日間マッキンレー・大滝・氷河コース(7-8月発).....	347,000円
●組合せ多彩。魅力さまざま。東南アジア・南太平洋。	
フリータイム香港4日間(毎週発)(東京・大阪発).....	123,000円
JOY香港・マカオ5日間(毎月発)(東京・大阪発).....	160,000円
フリータイムマニラ4日間(毎月発).....	116,000円
フリータイムマニラ・香港6日間(毎月発)(東京・大阪発).....	152,000円
フリータイムバンコク・香港5日間(毎月発)(東京・大阪発).....	182,000円
JOYマニラバンコク・香港6日間(5-8-10-12-51年2-3月発).....	(東京・大阪発) 215,000円
フリータイム東南アジア7日間(毎月発)(東京・大阪発).....	211,000円
フリータイムバリ島と香港7日間(毎月発).....	249,000円
JOYインド7日間(4月発).....	282,000円
JOYバリ島と東南アジア8日間(5-8-10-11-51年1-3月発).....	301,000円
マイプランインドネシア8日間(4-8-10-12-51年3月発)338,000円	
フリータイムオーストラリア・ニュージーランド10日間.....	(4-5-8-10-12-51年3月発) 412,000円
JOYオーストラリア・タスマニア8日間(4-11-51年1-3月発).....	431,000円
フリータイムタヒチ8日間(4-5-7-8-10-51年3月発).....	318,000円
JOY南太平洋とオーストラリア・ニュージーランド13日間.....	(10-12-51年2-3月発) 549,000円
JOYタヒチ8日間ボラボラ島コース(4-5-7-8-10-51年3月発).....	377,000円

●世界中へその他のコースもいろいろあります。
●価格に航空運賃の変更により変わる場合があります。

最新版パンフレットさあげます

クーポンをハガキにばり、住所・氏名・年齢・職業・電話番号・出発予定日を記入のうえ、郵便番号100-91東京中央郵便局私書箱205号 日本航空メールボックスまで、お申込みください。

クーポン インフル 2-93 1

いい旅しよう。

JALPAK 日本航空





ヨーロッパで圧倒的人気の
若獅子ムーティが
最高キャストを結集して
完成した壮大なオペラ!

リッカルド・ムーティ・デビュー盤
★ 来日記念盤 ★

ヴェルディ
歌劇

アイダ 全曲

この豪華なキャスト!

アイダ……………モンセラ・カバリエ(ソプラノ)
ラダメス……………ブラシド・ドミンゴ(テノール)
アムネリス……………フィオレンツァ・コッソット(メゾ・ソプラノ)
ランフィス……………ニコライ・ギヤウロフ(バス)
アモナスロ……………ピエロ・カプッチーリ(バリトン)
エジプト王……………ルイジ・ローニ(バリトン)
使者……………ニコラ・マルティヌッチ(テノール)
歌女の長……………エステル・カサス(ソプラノ)

リッカルド・ムーティ指揮

ニュー・フィルハーモニア管弦楽団

コヴェント・ガーデン王立歌劇場合唱団

王立軍楽隊のランベッタ一連

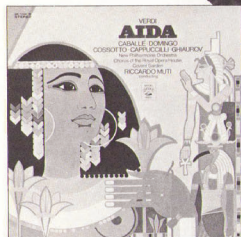
EAC-77034-35 30cmステレオ3枚組 ¥6,900 (PTS-III)

別冊解説書付・カートン・ボックス入り 1974年7月録音

まさしく理想的な名演——ブラヴォー! ムーティ!

高崎 保 男

一生に一度でもよいから、〈アイダ〉をこんな豪華な配役で聴いてみたいと夢みなかった人はいないだろう。この前のメンヘン・オリンピック芸術展示に、ミラノ・スカラ座が参加して主演したときの〈アイダ〉より、さらに一段と充実したこの強力なキャストを、あらゆる困難と妥協を排して実現しただけでも、このレコードの音後にあるたけしい理念がうかがわれるのだが、ここに私たちが聴くのは、単なる豊麗巨大な美声たちの“瓶くらべ”ではなく、よりすぐった“イタリヤ声”と、そのきわめて性格的な表現力によって十全に歌い出されたヴェルディのきびしい音楽悲劇の全音に他ならない。つまり、これは純粋豪華であると同時に、最渾身人間の悲劇としての〈アイダ〉のあるべき姿が、過不足なく濃いつくした点こそ、まさしく理想的な名演なのである。イタリヤ・オペラ界の次代になう新鋭指揮者リッカルド・ムーティのさっそうたるデビューにも、声を限りに「ブラヴォー!」を叫ぼう。



ムーティの第2弾 近日発売予定

ケルビーニ・レクイエム ニ短調 (男声合唱と管弦楽のための)

リッカルド・ムーティ指揮

ニュー・フィルハーモニア管弦楽団/アンブロジアン合唱団



エンジェルレコード

発売元東芝EMI株式会社